俺の青春ラブコメは狂愛に浸食される

根王

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

修学旅行での嘘告白でイジメを受ける八幡だったが雪乃を始めとするヒロイン達により救われるが…自己犠牲で解決する八幡を守ろうと彼女達は…狂った

自分はこれを『狂愛』と呼んでます

短編でごちゃごちゃしていたので、独立させました。こっちの方が見やすいかと…

続編ができました。尚、健全ですがＲ―１５にしときます　ｈｔｔｐｓ：／／ｓｙｏ

setu.org/novel/213538/

目次

狂愛に沈む八幡 ―― 1
狂った日常 ―― 4
彼は拒めない ―― 10
もう救えない ―― 25
疑問 ―― 38
重い思い　前編 ―― 49
重い思い　中編　グループの崩壊 ―― 65
重い思い　後編　文化祭の真実と… ―― 79
彼は狂愛にまた浸食される ―― 87
彼が選んだ未来は… ―― 100

狂愛に沈む八幡

俺はどこで間違えたのか…

『比企谷君…いえ八幡…もう大丈夫よ。あなたを傷付ける存在を全て消したわ。ふふ、うふふ…八幡を傷付ける人や世界に価値なんて無いわ…そんなもの消えてしまえばいいのよ』

『ヒッキー…ごめんね。あの依頼を受けなければこんなひどい目に遭わなくて済んだのに…だからね、あたしの体好きにしていいよ?どうしたの?どうして後退りするの?ねぇ…ねぇ…なんで逃げるのヒッキー?』

自己犠牲のやり方しか知らない俺は知らず知らずのうちに彼女達の心に傷を負わせていた事を知らなかった。いや、知るべきだった。

『八幡おはよ。えっ?何で居るの?それは夫婦だからでしょ?アタシはあんたの奥さんであんたはアタシの旦那さん…だから問題なんて無いでしょ?だから部屋から出なよ。ご飯冷めるよ?』

『八幡く～ん♪元気だった?よかった～、もし何か困った事があったら何か言ってね?私が持つ権利で解決してあげるから。君を貶す存在はこの学校に必要ないからね』

そして、俺は密かに愛されていた。だが、彼女達の愛は狂っていた。その愛は俺の体と心を蝕んでいった。

『八幡君は優しいね。君を陥れようとする馬鹿と恩を仇で返す屑にこんな気遣いをするなんて…その優しさをもっとお姉さんにしてくれたら嬉しいなー。できれば　ひ　と　り　じ　め　したいから今度一緒にデートだぞ♪』

俺は正気を保つ事ができるのだろうか…それとも…飲まれ沈むのか…

朝早く起きる。起きてベットの周囲を見渡し異常が無いか調べる。寝る前に写真を撮りそれを見比べ、物が動いた形跡がないか。ベットの下に誰かいないか。窓に鍵が掛かってるかどうか。部屋を隈なく調べ調べ切って何もなかったら直ぐに制服に着替える。そして、朝食を用意して済ませる。

実は冷蔵庫に彼女達が作った料理があるのだが何かしらの体液や媚薬、睡眠薬など明らかに料理に使う物ではない物をぶち込んでいる。ダークマターは例のあいつだ。これはこれで命の危機が迫るので口にしないというかしたくない。

「ごちそうさま…さて行くか」

小町と両親を起きる前に家に出るじゃないと比較的に家が近い川崎が来てしまうからだ。川崎の器量の良さに両親はすっかり信じ込んでいて簡単に家に上げてしまう。それを防ぐ為に早出する。

足取りは重い。でも学校に行かなければ携帯が鳴りぱなっしで催促のメールが来る上にＧＰＳでも埋め込まれてるレベルで居場所を特定する。衛星で監視されてるじゃないかと疑っても良いレベルだ。実際にそう思う事が度々起きている。

しかし、何が何でも学校に行き彼女達に姿を見せなければならない。学校なんてカサンドラと思っていたが…それ以上のカタコンベじゃないかと思っている。今日も俺は精神がすり減るだろう…猛獣の檻に放り込まれる兎の様な気分で学校に向かった…誰かに見られている感覚を感じながら…

「よしよし…今日はちゃんと登校してるね…雪乃ちゃん達に連絡と…」

狂った日常

そもそも何故こんな状況になったのか。まずは文化祭の俺の自己犠牲で火がつき、修学旅行での依頼で更に燃え上がった…というより爆発した。雪ノ下と由比ヶ浜は俺を傷付けて解決する事を望んでいなかった。文化祭で相模に暴言を吐いて彼女を悲劇のヒロインに仕立てる事で相模のヘイトを俺が集めた。しかし、これにより俺の評判は下がる事になり、陰口を言われるようになった。

そして、修学旅行…これが彼女達の理性の歯車が狂った瞬間だ。葉山グループの問題を俺が二人が忌み嫌う自己犠牲で解決してしまった時に狂ったのだろう。二人は川崎や城廻先輩、雪ノ下さんを仲間に加え俺に暴力や陰口を言う生徒達を断罪の名の元で裁いたのだ。歪んだ正義とも言えるだろう。

一方で葉山グループだが…

「…」ペラ

海老名さんは三浦と一緒にいるようになった。由比ヶ浜は海老名さんに対して罪悪感があるらしく暫くは距離を置くようだ。一人の時はこのように何かの本を読んでる。

彼女からの謝罪を受け、その後葉山グループから抜けた。
「姫菜…」
一人だけ蚊帳の外だった三浦は戸部の告白の件を知らず、俺に全て押し付けたとして葉山に激怒しグループを抜けた。俺と奉仕部に謝罪して海老名さんが孤立しないように一緒に居る。いつかは由比ヶ浜と復縁できるように努めるらしい。海老名さんが学校に来てるのを確認して安堵してるようだ。

戸部は…落ち着きがある生活態度になり、髪を黒く染めてるらしい。俺のイジメが発覚するといの一番に駆け付け土下座してきた。自分がどれだけ馬鹿な依頼をしたのかを…噂を流した大岡と大和とは絶交したらしくクラスでは一人でいる。だが、部活のメンバーが支えてるらしく居場所はサッカー部になっているそうでよかった。あいつもあいつで被害者だからな。
大岡と大和は碌に事実を調べようとせず。俺の悪評を広めイジメを助長したとして

停学処分を受けて学校に来ていないが…それ以上に部活での立場が失い同級生からも恨まれる事態になっている。理由は所属する野球部とラグビー部で数ヶ月の部活動停止と対外試合の禁止を言い渡されている。特に試合というレベルアップの場を失った彼らは二人を許す事ができず部活での居場所を失い半ば追い出される形で退部となった。

相模は…文化祭で明らかになった真実から周りからの白い目に耐えきれなくなって引きこもりかけたが。俺がフォローする形で今は学校に来ている。それでも由比ヶ浜と川崎からは殺気に溢れた目で睨み付けられ怯えている。因みに俺が相模に言い詰める奴らに言った言葉はこれだ

『お前達もサボったんだろ?なら相模と同罪だ。相模を責める権利は無い』

流石に言い返せなかっただろう。相模と一緒になってサボったのだから。その後、その状況を作り出してしまったお詫びとして雪ノ下さんが夜這いを仕掛けようとしたがマイルームのドアを死守し窓も完全に塞いで完全勝利のS判定をかまして防衛に成功。あの時の冷や汗は半端無かった着ていたパジャマが汗だくになってパンイチで寝た。誰かが天井から見ていた気がしたが疲れですぐに寝てしまった。

他にもF組の男子7名中4名は停学処分で3名は退学処分となった。実は体に痣ができるぐらい殴られライターで炙られそうになったりカッターナイフで首元を突き付

けられたので傷害と障害未遂で警察に厄介になったが…実は川崎と雪ノ下がそいつらを返り討ちしていた。川崎は身に着けた空手で急所を的確に叩き込み雪ノ下は合気道で投げていた。その間に由比ヶ浜が先生達を呼び俺がイジメられていた証拠を突き付けて俺のイジメは止んだ。

F組の教室の空気はかなり重い…原因のはあいつだ

「葉山…」

葉山…あいつの状況は一言で言うと地獄…かもしれない。今までの事が周囲に知られ広まった。テニスコート、チェーンメール、千葉村、文化祭、修学旅行…テニスコートでは戸塚が言い返せない事を利用し強引に使おうとした。チェーンメールでは身内に犯人がいるのに有耶無耶にした。（犯人は大和だった）千葉村では自分の都合を押し付けて留美を無理矢理仲良くさせようとした。文化祭では無責任な相模を推薦し文化祭の崩壊の危機に間接的に関わっていた事と真実を隠していた事。修学旅行では自分のグループの問題を俺に丸投げにして学校での立場を失わせたとして、彼女達から罵倒

されて教師陣と両親からも叱責されクラスメートからの信頼を失い『卑怯者』というレッテルを貼られた葉山…

周りからは皆の葉山隼人を演じできもしないのに首を突っ込み余計に事態を悪化させる…そして、俺が尻拭いをする。あいつは否定していたが事実俺が尻拭いしているので反論ができず。あいつは見事に仲良くしていた皆からハブられ見捨てられる結果となった。皆と仲良くを信条とするあいつが皮肉なことに皆から拒絶されるとは葉山自身が思わなかっただろう。

教室でのあいつはただ俯いているだけ時折何かを呟いているが俺には分からない。戸部と三浦に話掛けてやり直そうとしたが彼らはそれを受け入れなかった。それはそうだ。どう言おうがグループの人間を裏切ったからだ。シンボルでもあった金髪は黒に染め、坊主頭になっていた。目は俺以上に腐っている。

でも俺は俺で問題があった。

「やっはろー!ヒッキー!」

今日も狂った日常が始まる。いつもの日常は帰ってこない。どんなに嘆いてもだ。

彼は拒めない

独特な挨拶で俺に抱きついてくる少女…そう由比ヶ浜だ。彼女はやたら俺にボディタッチしてくる。恐らくわざとだろう。凶悪なガハマメロンを押し付けるあたり半端ない。由比ヶ浜マジ半端ない。普通のシチュエーションなら鼻を伸ばしたがるがそんな状況なんかじゃない断じて

修学旅行の依頼を受け海老名さんと俺の気持ちを考えられなかったと反省した由比ヶ浜は俺に対してのお詫びとして『身体』で払おうしたのだ。その時、由比ヶ浜からは狂気を感じ取って直ぐに逃げ出した。今では、当たり前の様に抱きつきベストプレイスでは俺の首に吸い付いたり耳を甘噛みする辺り犬のマーキングに近い事をしている。ある意味恋の狂犬と言った所だろう。

だが、これでも幾分かはマシなのだ。俺が嫌がる素振りを見せると中断するので他の4人よりはマシである。ただ気掛かりなのはもしタガが外れた瞬間こいつはどんな手段に出るのか？どんな行動をするのか？皆目検討がつかないのだ。

「えへへ、ヒッキーの匂い…」すんすん

「ところ構わず匂いを嗅ぐの止めてくんない？めっちゃ恥ずかしいんだけど」

最近抱き付いてきては匂いを嗅ぐ…発情した犬かよ。というか発情してるよ（遠い目）
「はぁはぁ…ヒッキー…もう…」

「我慢できないよ」トロン
「ふぁっ!?おまっ朝っぱらから盛り過ぎだろ!!」
由比ヶ浜の目はハートマークでも映ってるじゃないかレベルで発情している。流石はビ〇チガハマッ!!恐ろしい娘!!現在進行形でも恐ろしいけどね？
「ねえ…今から二人だけで良いことしようよ…ヒッキーの愛が欲しいよぉ」
上目遣いにガハマメロン、とろんとした発情した目は俺の理性に容赦なく削ってくる。しかし、俺は耐える。
「ほ、放課後な…放課後に構ってやるからさ」
「…分かった。でも約束は守ってね♡」ハイライトオフ

なんでハイライトオフをそうも簡単に消えるんですかね？有給ですか？コノヤロー。休み時間までの俺を堪能するとか言って俺に抱きついて臭いを嗅いで席へと戻って行ったが…もう一つの山場を迎えていた。

「八幡…」
「よ、よう川崎…どうｓ」
「なんで？」
「へ？」
「なんで先に行っちゃったの？アタシは奥さんでしょ？置いて行っちゃ駄目でしょ？」
そう川崎だ。狂った日から俺の家に頻？に来るようになった。器量が良い為か両親はあっさり川崎を受け入れている。俺をイジメから守ってくれたり食事を用意してくれるんだが。この様に俺とは『夫婦』という仲らしい。なんでそんな思考に行き着いた

のかを知りたいよ（泣）。
「ねぇ？聞いてんの？ナンデ」

「ナンデ？」
　ヤバい‼この状態になると色々と不味い‼とにかく言い訳を‼
「ほ、ほらあれだよ。今まで自堕落な生活してきたろ？それを直そうかなって早起きして早く登校してきたんだよ」
　どうだ？もうこれ以上の言い訳なんてできねえぞ‼
「そっか。『旦那』として自覚したんだね。よかったよかった…アタシも支え甲斐があるよ。八幡が素敵な旦那さん…ふふふ…」
　悲報、川崎ワールドの俺、素敵な旦那様になる。クソッ…ますます退路が塞がれてる気がする。というか相当美化されてる気がする。
「でも朝ごはんをなんで食べてくれなかったの？ドウシテ？」

川崎は疑問や不審な点を見つけるとすぐに質問してくる。小さな子供が嫌いな物を残した時のようにしつこく聞いてくるのだ。俺が川崎が作る料理を食べなかったりするとこのように質問攻めにされる。恐らくだが彼女は俺に嫌われてるじゃないかと不安になっているのではないかと思っている。だから、しつこく質問し嫌われてるか嫌われてないか知ろうとしているのだろう。

病んでなければな…問題無いんだが。エ○ゲーばりのハーレムの状態でハッピーエンドなのに病んでる所為でバットエンドかｎｉｃｅ　ｂｏａｔの展開にしか見えない。その内、死兆星が見えそうなんだけど?神様俺に死ねというのですか…戸塚を男として生まれさせた時に恨んだのが仇になったのか…

「い、いやな小町がわざわざ作ってくれてからな。それに昼は川崎の弁当が食べたいから楽しみにしたいんだよ。ほら川崎料理旨いからさ」

「そうなんだ。だったら早く言ってよ八幡、そしたら今日から愛情たっぷり作るからさ…もう素直じゃないね…てでもそういう所は大好きだけど」

いや愛情たっぷりとか明らかに体液入れるよね？いつもより倍の量入れるよね？やたら細いひじきとか鉄っぽい味のソースとかさ。堪忍してつかあさい‼食うたびにＳＡＮ値が削り来るとかもはや食事じゃあねぇ拷問だ。まだファミパン一家の食事光景の方がマシ…いや同じくらいか

「八幡…八幡…八幡…えへへ…」ハイライトオフ
恍惚のあのポーズを取る川崎。やべぇよさっきから冷や汗と震えが止まらねえ。今すぐにでも帰りたい（泣）授業中でも二人から熱い視線が刺さるは刺さる。その内、穴でも空きそう。

午前中の授業は全て終わった…やっと昼休みになるが案の定彼女達が集まる。集まっては俺に群がり陣形のインペリアルクロスを組んでは俺を守る（取り囲む）。ちなみに皆病み状態なのでステが大幅に上昇しております。つまり無敵。素早さダウンとか彼女達に効かぬ最強…じゃなくて最狂、手を出した瞬間そいつに死が降り注ぐ
こうして、俺は守られながら屋上へ連行され集中攻撃を受ける。フレンドリーファイヤー？パーティーアタック？いえいえ平常運転です。（遠い目）
「ひっふぃ～…」

「あぁ八幡…うふふ八幡の体漸く見れたわ。ふふ幸せよ…私がどれだけ我慢したと思う？それはそれは長い時よ。それで…」

ゆ　き　の　んご乱心。由比ヶ浜は首もとに吸い付き雪ノ下は俺の胸に顔を埋めてもう目が深海の様に…駄目だこれ以上見たら吸い込まれるそうだ。ついでに雪ノ下の話が長い怖い。

「はいあーん…ふふ」

川崎は卵焼きを差し出すが…指が絆創膏だらけなのはどういうことですかね？しかし、俺が食べると言った以上食べなければならない。ここで拒んだら…後は分かるな？

「八幡私も作ってきたわ。ちゃんとタベテネ？」

「ヒッキーのマッ○スコーヒー美味しいよぉ…れろぉ」

「ふふ、美味しい？」

「おおう…美味いぞ」

鉄の味がするけど…分かったか？これが俺の昼の光景だ。頼むからベストプレイスを返して、とういか雪ノ下の指にも絆創膏…お　前　も　か　雪　ノ　下。料理に体液をぶち込むブームとかあんの？いやねえよだろ。後、由比ヶ浜。俺が飲んだマッ○ンの飲み口を舐めまわすの辞めてくんない？ビッチ通り過ぎて愛に飢えた猛犬だよ。全然嬉しくねえ間接キスだな。

「ヒッキーの手の味がするぅ…おいしい…えへへ」
何か由比ヶ浜が新天地を切り開いた事に驚愕なんだが、あれか手をかざすと舐めてくる飼い犬かよ。俺の昼休みは平穏で終わらない穏やかだったあの頃を返してくれ…

放課後、俺は生徒会室に行かなければならない。そう城廻先輩に会いに行かないといけない。彼女もまた狂ったのだ。生徒会長としての権限と人脈を使い俺をイジメた奴らの居場所を奪ったのだ。更に俺に対しての陰口や暴行をしようとする輩を見つけ次第、制裁している。大岡と大和の立場を奪ったの城廻先輩の仕業である。次に相模の居場所を奪おうとしたが城廻先輩は自分にも落ち度があったとして相模だけは奪われずに済んだがもう以前の様に立ち振る舞う事はできないだろう。俺がある程度フォローはしたが…
あの時の事を思い出しつつ生徒会室へ赴く勿論足取りは重いし怖い。だが、彼女達を拒んだ方が１００倍恐ろしい。由比ヶ浜や川崎なんかが暴走したらずぶずぶな肉体関

係を結ぶ事になる。それで孕ませるような真似をしたら…考えただけで恐ろしい。

ノックして返事を待つ。まあ十中八九居るな

「どうぞ～」

独特なふわふわな声が聞こえる。普通ならこの声に癒されるだろう。だが今の彼女は狂ってる。他の彼女達と違うが

「し、失礼します…」

「あ、いらっしゃい八幡くん！お茶でもどうかな？」

「い、頂きます…」

城廻先輩から差し出されるお茶を飲む。城廻先輩だけは何も入れないので安心できる。他奴らは言わずもがな。

「八幡君、今日は何かあったかな？」

「いえ別に」

「誰かに悪口なんて言われてないよね？」

「言われてないっす…」

「誰かに暴力は振るわれてないよね？」

「ないっす…」

「誰かに悪戯されてないよね？」

「されてないっす…」
「誰かに付けられてないよね？」
「だ、大丈夫です…」
　心当たりがありまくりだけど。例えば、同級生とか同級生とか同級生とか…その同級生の姉とかありまくりだけど被害を受けてないからセーフ。
「そっか～よかった～。ねえ比企谷君、もし何かあったら言ってね？」

「だって君の本質を知らない生徒はこの学校に要らないんだから♪君のお陰で文化祭は成功した…それに戸塚君や川崎さん、留美ちゃんにたっくさんの人を救った。なのにあの蛆虫達は君を陥れようとしたり捨て駒にしようとしていた…あんな人達はね要らないしどこかに消さないとね。それにあの時はごめんね？もうあんな事は言わないから…もし言っちゃったら」

「死んで詫びるしかないね」ハイライトオフ

「き、気にしてませんから…あの時の事は気にしてませんよ。ああするしかなかったんで…」

城廻先輩はあの時の事を悔やんでいるようだ。でも俺がイジメられている事を知ると冷徹さを身に着けた。だから以前とは考えられない粛清を行ったのだ。本当に本人かどうか疑ったが…

「君は優しいね…でももう駄目だよ？相模さんなんて庇う事はないんだから」

「分かってます。じゃあ俺はこれで…」

「あっちょっと待ってね」ギュ

「し、城廻先輩？」

「えへへ…八幡君の感触だぁ～」

城廻先輩は俺の胸に抱きついてぐりぐりしてくる…臭いを嗅ぐ仕草が見受けられたがもう慣れたよ俺は考えを捨てたよ。暫くしてから解放され俺は奉仕部へと足を運んだ…

「うへへ…八幡君の臭いは良いなぁ脳が溶けそうだよぉ～独り占めしたいけど陽さんの計画までガマンシナキャ…ガマンシナキャ…」

「ようまたｓ」
「ひゃっはろー！八幡君！」
「ふふやっと来たわ八幡」
　奉仕部には雪ノ下姉妹が待っていた。勿論、目にハイライトは無い。お願いだから仕事して？その目には『ニガサナイ』という意思が伝わる。こんな美人姉妹に言い寄られて嬉しくない男は居ないが病んでるとそうも言ってられない。かたや完璧に近い姉、かたや大和撫子のように気品溢れる妹…どっちもハイスペックで逃げ場は存在しない。
「やっと八幡に会えた～大学になんてつまんない男しかいないしたいくつ～」
「姉さん近すぎよ。私もやっと八幡に会えたのだから」
「いや昼休みに…」
「あれから４時間も５時間も離れていたのよ‼私がどれだけ我慢したと思っているの

‼」

鬼気迫る顔で俺に迫りくる雪ノ下。俺の眼には雪ノ下の眼がどアップに映っている。深海よりも暗く今まで見たどんな黒よりも真っ黒だった。意識が飛びそうだがここで飛んでしまったら目が覚めた時にハーレム主人公でも顔真っ青なエンディングが待ち受けているのでひたすらに耐える。

「まあまあ雪乃ちゃん落ち着きなってどこにも行かないんだからさ」

「ええ、そうね。彼は現にここにいる…ふふどこにも行かせない…」

「…」

もう沈黙しか残っていない。本当になんでこんな事になったのか…

「そういえば今日から私の当番だったわね。さあ八幡帰りましょう」

「か、帰る?ど、どこに?」

「どこにって…あなたの家へよ」

「はっ?」

「沙希ちゃんだけ出入りしているのはどうしても我慢できなくてさー今後の事を考えてローテーションを組んで比企谷君のお家にお世話をしに行くの♪どう完璧でしょう」

おいおい俺の家は女友達で行くような場所じゃないんだぞ?それにお世話計画とか完全に俺ん家に行きたいこじ付けだよね?俺の両親は快諾してるの?

「お気持ちは嬉しいですが…両親の許可が下りないと…」
「既に取ってるよ」
「ふぁっ!?」

「八幡さあ行きましょう♡」
「おう…」
　もう声を出す気力が沸かねえよ。絶賛雪ノ下と腕を組んで帰宅中…他の生徒は皆目を見開いて俺達を目で追っていた。他に何人か強く憎悪の視線を感じ取ったが気にしない気にしない。というか怖くで振り向きたくない。
「ねえ八幡。何か食べたい物はないかしら」
「特に無い…好きなように作ってくれ…」
「ならあなたの家の食材を借りるわ。任せてちょうだい」
「い、いや俺も手伝う…」
　思い出したこいつらに任せっきりにしたら間違いなくとんでもない物をぶち込むので監視という意味合いで手伝わないとな…それに雪ノ下さんが良からぬ事を考えていたような気がする。警戒しておこう…

「雪乃ちゃん今頃どうしてるかな～？まあいっか、私は私であの計画を実行させないとね…皆が幸せになれる計画で誰もが傷付かない世界の完成…ふふ…あはははは…駄目…今からでも笑みが漏れちゃう♪待っててね…」

「私達の八幡」

もう救えない

ｓｉｄｅ　八幡

今日から彼女達によるお世話という名の「管理」が始まった。俺に引っ付く雪ノ下、今日は両親が遅く帰るので会う事は無かった。風呂に入ってる間、小町と話していたようで風呂を出たら雪ノ下は帰っていた。少しは静かな夜に成りそうだな。小町に感謝だな。

しかし、大人しく帰って行ったのは凄く気になるな…明日は何も起きなければいいが。というか明日は誰になるんだろうな…

ｓｉｄｅ　小町

今日はあの人を追いやる事が出来た。あの人達は私を傷付ける事はできない。それはお兄ちゃんが悲しむからだ。あの人達はお兄ちゃんを悲しませる事はしたくないは

ず、だから私はこうやって体を張る。そうすることであの人達に牽制する事ができるから…あの時の会話を思い出す…

「いい加減にして…」

「あらどうしたのかしら?小町さんなにか起きて?」

「惚けないでください。お兄ちゃんの部屋にカメラ仕掛けてたのはあなたですよね?雪乃さん」

「…流石は小町さん。姉さんの計画に気付いていながらどうして反対するの?私達は八幡を守る為にしてるのに」

「分かっています。でもっ‼」

「あなたは分かるかしら?学校で彼がどれだけ苦しんでいたかを…確かに彼のした事はとても褒められないけれど人を救ったのは事実…私も彼に進むべき道を照らしてくれた…でもあの無能共は彼を傷付けた。彼がどれだけ有能な人間なのかを知らず、だから思い知らせてやったわ…彼にした事の3倍以上苦しんでもらったの。居場所を奪ったのならそれ以上に居場所を奪う。彼を傷付けたのならそれ以上に痛い目に遭ってもらう…彼らもいい勉強になったでしょうね。ふふ…」

修学旅行の後、お兄ちゃんは酷いイジメに遭っていた…どうにもできない助けられない私はただ見る事しか出来なかった。そんな中、雪乃さんのお姉さんの陽乃さんを始め

とするお兄ちゃんを守ろうとした人達がいた。お陰でお兄ちゃんへのイジメは無くなったけど…

その代わりに雪乃さん達のアプローチが激しくなった。最初は気のせいかな思ってけど沙希さんが家に出入りする度に不審に思い…その背景に陽乃さんが関係している事が判ったので思い切って直接聞いてみた。

聞いて後悔したけど…結衣さんも3年生の人も狂った。お兄ちゃんの事を思ってくれているのは感謝だけど…

「だからと言ってお兄ちゃんに精神的な負担は許しません。助けてくれた事に感謝しますけど…これだけは覚えて置いてください」

「兄をこれ以上傷付けるような真似をしたら絶対に許さない」

「…」

雪乃さんを睨みながらこの言葉を吐き捨てた。だけど雪乃さんは私の睨みなんかに動じず冷たい目で私を見下ろしていた。

「…今日はここまでにしとくわ。本当が八幡と添い寝したかったけど…」

あなた達が添い寝なんかしたら間違いなく既成事実を作るでしょう!?それだけ防げ

ないと…まだ１０代で叔母さんになりたくないよ…雪乃さんの背中を向けこの家を後にした。お兄ちゃんに対するせめての償い…できる限りの事をしないと…願わくは元通りに…

ｓｉｄｅ　八幡

今日も彼女達から攻撃をブレイク（戦闘機の回避行動）しつつ、昼休みまで持ちこたえる。長く苦しい戦いだった…実はとある人物に呼ばれている彼女達の眼をかいくぐりながら校舎裏へと場所を移す。そこに待っていたのは

「よう待たせたな…」

「葉山」

「やあ…待っていたよ」

坊主頭から髪が少し伸びた葉山がいた。何だよ普通にイケメンじゃないかぼっちだけど…今日机の中にこいつからの置手紙があった『話がある』これだけだったが俺は何

か伝えたい事があると睨んでいる。
「で？何の用だ早く言え」
「ああ…お願いがあるんだ…俺のグループをもとに」
「無理だ」
「ど、どうして？頼む…あの頃に戻りたいんだ…頼む‼」
「…無理だ」
「なんでなんだ！君も戻りたいだろ!?修学旅行前のクラスに！頼む‼元に…」
「だから無理だ。分かるだろ？雪ノ下さんが背後にいる限り俺もお前もクラス全員は元に戻る事はないし俺もどうにもできない…」
「そんな…」
　あんな雰囲気で良く言えるな…というかあいつらにバレたらどれだけ危険か分かっているのか？項垂れる葉山に俺はこの言葉を掛けた…いやこれしか掛けられなかった
「諦めろ葉山…お前は戸部と海老名さん、三浦の信頼を裏切り…そして彼女達の怒りを買っちまったんだ。俺でも止める事しかできない。もう戻らないんだよ…葉山」
「それにお前が俺に自己犠牲のようなやり方までに事態を悪化させて彼女達の逆鱗に触れたんだ…恨むなら自分を恨むんだな」
「あぁ…俺はただあのグループを…守りたかっただけなのに…うぁ」

もう救えない…お前も俺も…救われない

昼休みが終え時間が過ぎ放課後になる。葉山はあの後から死人のような顔をしていた。もう無理だろうな…彼女達の牙に掛かってしまった人間達を見ればどうなるか分かるはずだ。だから俺に不用意に近付くと危険という事が周囲に知られているからな。戸塚と材木座がよく心配してくれてるが…二人にはあまり俺との接触を避けるように言ってある。

奉仕部にて…今日は雪ノ下と由比ヶ浜、川崎がいた。相変わらずやっぱい目をしているが

「えへへ…ヒッキー」ギュ

「…」プルプル

「…チッ」

あっこれは…修羅場ですね？誰か防刃防弾チョッキと衛生兵を用意してくれませんか？怖い

「邪魔するぞ」

ノックして入って来たのは平塚先生だ。

「ちょっと頼みたい事があってだな」
　平塚先生からの依頼…それは
「えーと…お前が生徒会長になるのを防いで欲しいと」
「そうなんですよーいつの間にかこうなっていてー」
　平塚先生に促されて部室に来た一年生の一色いろは。サッカー部のマネージャーでよく葉山と交流があり、悪乗りで立候補されたらしい…それにしてもこいつあざといな…そんでウザイ。
「ごめんね～八幡君？ゴミ…イケナイ人達をちょっとお灸を据えてる時にね。選管をちゃんとやっていれば…」
「いや城廻先輩の所為じゃありませんよ。一色…お前普段からその猫被った態度を取っているのか？」
「なっ!?猫被りってなんですか‼失礼ですよ‼」
「いや、お前あざといからそれわざとだろ？それでクラス女子に反感を買ったんだよ。自業自得だ」
　俺がわざと一色の応援演説で不信任にさせ落選させる…なんて事をすれば彼女達は決して許さないだろう。それと城廻先輩？それお灸を据えるレベルじゃないです。処刑です。

「…あー分かっちゃいましたか？先輩って意外と観察眼が鋭いんですね」
「まあー色々あってだな」
　日頃からこいつらの動きとか表情とか見て危機を可能な限り回避してるからな。それに陽乃さんの仮面より薄いんだお前のあざといマスクぐらいシールを剥がすぐらい簡単な事よ。
「ちょっといろはちゃん…近すぎだしヒッキーに」ハイライトオフ
「そうね…ちょっと…彼に接近し過ぎね」ハイライトオフ
「アンタ…調子に乗ってるよね？」ハイライトオフ
「ちょっとこれ以上は…ねぇ」ハイライトオフ
「ひ、ひぇ!?」
「エ、エエ、エスケープッ‼」
　一色に対して交戦の態勢に入った彼女達から逃がすべく一色の手を引いて部室から退散、平塚先生は呆気に取られていた。取り敢えずひたすら逃げて靴に履き替えて更に逃走…
　あっお世話係が後で来るから俺死んだわ。すまん…小町、親父、お袋、戸塚…材木座は知らん。

「せ、先輩!?何ですかあの人達!?とんでもない殺気は‼」
「お前さ…こんな噂を聞いてるか？一人の男子生徒に危害や接触すると危ない目に遭うという噂を…」
「え?もしかして…先輩ですか?その男子生徒って…」
「そうだ。悪い事は言わない彼女達の逆鱗に触れない事だ。俺に過度に接触する事、危害を加える事…したら学校に居られなくなると思え」
「…マジですか?それ」
「おおマジだ…ただお前の依頼を蔑ろにするつもりは無い…後日、解決方法を考えておくかた待ってろ」
「わ、わかりました。でも、どうやって連絡しますか?携帯で」
「駄目だ。毎回チェックされる。悲しい事に家族と彼女達と数少ない友人しかないからお前のアドレス入った瞬間俺が死ぬ。そこで手紙のやり取りだ見たら捨てる良いな?」
「はい…分かりました。その怖くないんですか?何で逃げないんですか?」
確かに周りから見ればそう言いたくなるだろう。食事に体液混ぜる別の飯テロを起

こすし、学校ではあんな風にされるしお世話とか言って管理される。普通なら逃げたい…でも逃げられない。

「もう…手遅れだ。せめてもの償いだろうな…自己満足だが」

もう一つ言っていないが雪ノ下さんの事だ。どこまで見つけに来て…駄目だ想像したくない。あの人を怒らせたら最後…俺は彼女達の物になるんじゃねえか？

「そういう事だ…じゃあな‼気を付けろよ‼」

一色と別れ帰宅した。玄関の靴を確認したらあらビックリ知らない靴を発見…来るのが早すぎません？待っていたのは由比ヶ浜だった。

「ヒッキー‼」

俺を見つけた瞬間にルノ〇ールロケット…じゃなくて、ル〇ージロケットでもなくサブレばりの突進をかまして俺氏ベッドの上でダウン。だが、即リカバリー。だって、ベッドの上で失神したら彼女達からナニをされるか分からん。それに目の前にいるのは発情した犬だからな…マジでヤバイ。

「由比ヶ浜」

「な～にいヒッキー♡」

「ハウス。俺の部屋から出ろ」

「何言ってんのここが帰るべき場所でしょ？」

「お前こそ何を言っているここは俺ん家だぞ?」
「もうヒッキーったら、この先あたしも…」
「もう帰れよお前」(泣)

ｓｉｄｅ　葉山

俺はある人から逃げている。だが、捕まってしまった…椅子に縛り上げられ身動きが取れず口も塞がれている。必死に抵抗するが無駄だった…
やばい!このままだと本当に‼
「隼人さぁ…自分が何をしたのか分かっているの?」
俺は首を横に振り続けた。やましい事なんて…俺はあの5人に近寄っていないはずなのに比企谷との接触は見られてないはずだ!何故なんだ!?
「だから八幡君になんで話しかけたの?死にたいの?雪乃ちゃんは物凄く怒ってるよ?」
陽乃さんに口を塞いでいたガムテープを思いっ切り剥がされた。

「いっ!?…お、俺はただグループを元に戻したかったんだ‼別に彼に危害を加えようなんて微塵も思っていません‼」

俺は正直に答える。お願いだ！信じてくれ‼ただグループを再建して欲しいと頼んだだけなのに…

「うんギルティ♪」

「へ？」

「もう無理でしょうにあんたとあのグループは八幡にとっては疫病神みたい物だからね証拠としてあの二人が八幡の悪評を広めてイジメを悪化させてあんたはグループを守ってくれた恩人に何もしない…」

「隼人…あんたはただの屑だよ。みんな仲良くなんてできない…証明されたでしょ？それに過去に色々聞いたよ。ただ状況を悪化させようとして八幡が後始末する。ただの馬鹿じゃん…もういいよ今回は特別に許してあげる」

「ほ、本当ですか!?」

「ただし…条件付きだぞ♪」

翌日…

ｓｉｄｅ　八幡

由比ヶ浜のメロメロを躱しつつもガハマメロンにやられそうになった俺だが無事に生還。切れた小町が由比ヶ浜を自分の部屋に連れて行って寝かしたらしい。ありがとう小町…お兄ちゃんの貞操は守られたよ…ところがどっこい朝、登校する時、右腕をがっちりホールドされました。呪いの装備かよ教会行かなきゃ…と思ったが川崎が急に現れては左腕をホールド…俺は犯罪者か!?

ホールドされたまま教室に入ると珍しく葉山の姿は無かった。遅刻か？あいつもするもんだな

なんて呑気に考えていたら担任から衝撃の一言が…

「えー葉山は本日を持って他県へと転校した」

「マジで？」

疑問

葉山の転校…家の都合で転校したってそれは嘘だろうな…やはりあの人だろうな…

「雪ノ下さん」

間違いない雪ノ下さん以外存在しない。現に俺を虐めていたクラスメート数名を何らかの方法で県外に追いやってる…まさか葉山がターゲットになるとは…

でもおかしいぞ。あの会話は二人しか知らないはず…なのに何故、雪ノ下さんの耳に入ったのか。それが不思議で堪らない一体誰が…

勿論、俺は誰にも言っていない…それに盗聴機も外してあるから俺と葉山しかいなかったはず。戸部と三浦は呆然としている。かつては一緒にいた人物が急に転校するならそりゃ驚く。

ただ、川崎と由比ヶ浜はそんな事を気にも留めず俺にアプローチ…ぶれないなお前らそれを別な物に向けて欲しいんだけど…それにしても恐ろしいのはかつてグループの一人で親しかった葉山を『何とも思わない』という思考に俺は恐怖を感じた。中学生辺りにそんな思いをしてきたが由比ヶ浜の場合、友人を簡単に捨てたという事だ。

放課後、奉仕部の部室に赴き一色がやって来る。一色の開口一番が

「葉山先輩が転校したって本当ですか？」
「ああマジ。あいつはもう総武高校にはいない」
「えぇ～ちょーショックなんですけど」
「俺だってショックだよ」
　色んな意味でな。それにしてもあざとい…因みに雪ノ下のマッグカップが震えていたのを見て話題を変える事にした。どうやら雪ノ下に葉山の話はしない方がよさそうだ。
「それよりもお前の依頼の件だが…」
「何か案があるんですか？」
「それなんだが…寧ろやってみないか？」
「生徒会長をですか？む、無理ですよー‼私一年生だし…」
「八幡…私が立候補しようと思っているのだけれど。敢えて一色さんを立候補させるのは意味を教えて頂戴」
「…一色を立候補させたのは普段からあざとい態度で男子を手玉に取っているから「先輩っ!?」それを気に食わないので立候補させて雪ノ下辺りに負けさせて惨めな思いをさせる…それが彼女らの狙いだ。逆にこれを利用すればいいのさ」
「成程先輩…読めました。でも私こういう仕事初めてなんですけど…」

「それは俺達がある程度サポートする。お前が一人でもできるぐらいまでには成長させる。お前が優秀な部分を見せ付ければあいつらの思惑とは違った結果になって悔しがるだろうな」
「流石は八幡ね…分かったわ。私は立候補しないその方があなたといられる時間が増えるわ…うふふ」
「そ、そういう事だ！応援演説が必要だったら言ってくれ！」
「あっはい…」
ゆきのんがやみのんになりかけているので一色を避難させる。そして、あの事を聞く…聞いてはいけないと恐怖を感じる。しかし、ここで聞かないといけない気がした…雪ノ下を見つめると頬を赤くしていた。いや、そういう眼で見てないから
「あらそんなに私を見つめて…照れてしまうわ。もしかして今更惚れたの？」
「それは結構…聞きたいことがある」
「何？何でも聞いて…勉強の事、悩み事、将来について、私にして欲しい事…何でも言って♡」
「じゃあ聞くぞ…」

「葉山をどうした？」
　この問いに雪ノ下の表情が一変する…笑顔から真顔のフォルムチェンジ早過ぎぃ…背筋に寒気が走る
「今更あんな人どうでもいいでしょう？あなたが気に掛ける程ではないわ…それに私達はあなたしか興味が無いわ」
「話を逸らすなよ。葉山をどうしたと聞いてるんだ…あいつに何をした？あいつは別に何も…」
「したわ…」
「？」
「したわ。あの男は…文化祭では叫弾されるべきだった相模さんを庇い！真実を告げずあなたの学校での立場を悪くした‼私と結衣はそれで傷ついていたのよ…あなたに救われた人間としてどうしても許せなかったわ…なのに修学旅行で自分達のグループの厄介事をあなたに押し付けて‼ふざけてるのも大概よ‼あの男はあなたを利用しようとしか見えないのよ‼お陰であなたは沢山傷付いてしまったわ…だからグループを崩壊させてあなたが受けた苦しみの倍以上苦しんでもらったわ。そして今回…あなたに

また問題を押し付けようとした…だから選ばせたのよ。当然の報いよ…あの男は過去に私を見捨てて今になっては大切な人を傷付ける…最低な男よ」
「な、何を…選ばせた？」
「二つよ…命を取らないけど社会的に抹殺されるか二度と私達と八幡に顔を見せないように全てを捨ててどこか遠くに行くか…よ。結局、自分の身を優先して後者を選んだわ…」
　いやそれは命の危機と思うぞ…やはり妙だ。俺と葉山の接触を知る者はいないはずだ。盗聴器だって…これ以上どうする？聞くべきか？
「それにあなたはどうしてそんな下らない人間を気にするの？具合でも悪い？」
「いや、健康だ…至ってな。ただちょっと気になっただけだ」
　あー怖い。今日も学校が終わる…帰宅時間までずっと抱きしめられたが、いつも精神攻撃に比べれば大した事ではない。途中から来た由比ヶ浜にも背中から抱きしめられて背中に凶器をぶつけてくる…その栄養を頭に行かなかったのでしょうね？

「よう待たせたな…三人とも」
「ヒキオ来るの遅いし」
「うっす…」
「比企谷君…」
　俺は帰りにとある人物たちと会う為ドーナツ店に立ち寄った。そう元葉山グループの人間だ。この葉山が居なくなったという事実に困惑していた。そこで俺は自分の推測から葉山が消えた原因を教えに来たのだ…
「取り敢えず…雪ノ下に会って分かった事だ…あいつは二度目の五人の怒りを買ってしまった…」
「えっ？嘘、ヒキオに何もしていないのに!?」
「ヒキガヤ君…説明してくれるしょっ」
「千葉村でよ。雪ノ下が葉山に対する態度…覚えているか？」
「確か凄く毛嫌いな態度だったね…留美ちゃんを巡る話で」
「ああ、さっきの奉仕部のやり取りで雪ノ下は過去に葉山とトラブルがあったと思う。実際に千葉村の時に昔からの付き合いがあるって言っていた」
「じゃあ…それで隼人君はあんな目にあったんだ」
「あいつは皆仲良くを信条としていた…聞こえは良いが、あいつはそれを押し付けてる

だけだ」
「ちょっと…ヒキオ？」
「じゃあお前…雪ノ下と仲良くなれるか？」
「無理」
「だろ？あいつはそれを押し付けているんだよ三浦。それで過去に雪ノ下を傷付けた。更に俺を修学旅行で利用しようとしていた…本人にその意図は無かったとしても雪ノ下から見ればそう見えたんだろう」
　三人が下向く…修学旅行の件。葉山は中途半端な立ち位置により問題をややこしくし俺に助けを求めた。三浦は何も知らなかったというか一人だけ蚊帳の外だった。戸部に関しては振られる事を隠しておいて協力していた。
　海老名さんは兎も角この二人は被害者なのだ。葉山は「みんなの葉山隼人」を演じるばかり失態を見せたくなかったのだろう。結果、彼女達を怒らせる事になろうとは思わなかっただろうに…
「そう…だよね。私達は人任せにし過ぎたんだよ。誰かが助けてくれるって…それを言い訳に私と葉山君は君や奉仕部を利用していた…雪ノ下さん達が怒る理由も分かるよ…」
「自分が腐ってるからって、いい訳にもならないぞ。それにも戸部も…」

「勿論だべ…こういう事を甘く見過ぎたし…なんつーかその」
　この二人は俺に謝罪をしたという訳で彼女達からお咎めは無かった…ただ、一人の友人を失った
「ねえ結衣は…結衣は戻るの？あーしは…」
　三浦からの問いに俺は無情にも首を横に振る。
「由比ヶ浜はな葉山の事をどうでもいい存在として認識してる。『狂った日』から…」
「『狂った日』？どういう事しょっヒキガヤ君」
「そのまま通り、あの五人が狂った日だ…トリガーは俺が保健室に運ばれた時だ。リンチにあって気を失ってその時に目覚めたんだ」
「じゃあもう戻らないのね。結衣と隼人君がいたあの頃には…」
　首を横に振る。三人の表情に諦めという文字が浮かぶ…それから三人を先に帰させた…三浦達は薄々分かっていたかもしれないもう戻れない、と…それにあの五人に見つかったらただじゃあ済まされないからな…
　じゃ、俺もそろそろ…
「ひゃっはろー八幡…」
「あ」
「迎えにきたぞ♡」

「それで八幡…あの三人に何かされたかな？かな？」
「何もされてませんよ…安心してくださいよ。ただ葉山について教えただけです」
「ふーん、どうでもいいじゃんあんなの」
「…もう何も言いません」
　恐ろしい。本当に恐ろしい幼馴染であろう葉山をこうも簡単に切り捨てる…それ程までにも俺に夢中なのか。本当に狂った愛だ…だがそうなったのも、俺が原因だ。
「あれ？比企谷じゃん？ちょー懐かしいですけど」
「!?折本か…？」
「折本こっちに来んな‼そのまま帰れ‼」
「はっ？何言って…」
「ねえ八幡…」

「あいつ誰？」

濁り切った目が俺の眼前にあった。全てを飲み込みそうな眼だった…

「ひぇ…た、ただの同級生ですよ！中学の時の…ほら帰りましょさっ早く」

俺は雪ノ下さんの暴走を止める為、手を引っ張って行く。折本…俺の昔の黒歴史でありトラウマの記憶でもある。俺があいつに告ったなんか言ったら今夜、俺が死ぬ。という事で早急に退場する。折本とその連れは目を丸くしていた。そりゃそうだこんな美人の手を引っ張って行く光景なんて想像なんてしないだろうしな。

家に向かって暫く歩いている。今も手を繋げたままだ。

「もう八幡ったら大胆～お姉さん惚れちゃったぞ♡」

「…」

「あー隼人の事？」

「そうですよ…あいつは別に俺に何もしていない。どうして？」

「うーん…煩いから？」

「たったそれだけで…」

「グループを元に戻す？ふざけてるのはあっちでしょ…正直言って文化祭辺りから見限っていたかなー」

「もしかして相模を庇った事ですか？」

「そう♪隼人ってば雪乃ちゃんじゃなくて相模ちゃんを庇うんだから…まあ私も悪いけどあの時から隼人には愛想が尽いたよ。でも八幡は前から夢中だったぞ♡」

それ程までにキレてんなこの人…だから容赦ないのか。葉山…お前はそこまで『みんなの葉山隼人』でありたかったのか?上辺だけの関係で満足だったのか?そんなに周りから失望されるのが怖かったのか?

帰路について雪ノ下さんと無事帰宅…小町とひと悶着ありそうな雰囲気だったが特に何も起きなかった…よかったよかった。雪ノ下さんが丁度風呂に入ってる間にとある人物に連絡を取っていたコールして返事を待っている。

「早く出ろよ…葉山」

重い思い　前編

時は「狂った日」まで遡る

ｓｉｄｅ　雪乃

何があなたのやり方が嫌いよ。全て丸投げにしておいて私は何を言っているのかしら…文化祭の時の様に自分が傷付くやり方を止めて欲しかったのにどうしてあなたは

「自分を大切にしないの」

いえ、その原因を作ってしまったのは私達…由比ヶ浜さんもあの依頼を受けた事を後悔している。修学旅行で起きた比企谷の告白の妨害…文化祭で立場が悪くなった彼がそんな事をすれば火を見るより明らか、でも彼は何も言わない、今日は覚悟を決め話を聞こうとしたけど

「やっぱり受けるべきじゃあ…」

「あなただけの所為では無いわ。止めなかった私にも責任が…そういえば比企谷君は？」

「あれ、来ないね…あたし見てくるよ」

「私も行くわ…彼を一人にする訳にはいかない」

私達は比企谷君を探した。屋上から体育館まで…そして…早く聞こう…彼の口から真実を聞きたい彼はあんな真似をする人間ではない。きっと訳があるはず

「あースッキリした～」

「ホントざまぁねえな‼」

「人の告白邪魔する奴だしな」

校舎の裏に近付くと男子生徒数人を目撃した。嫌な予感がして校舎の裏に回るとぼろぼろの比企谷君を見付けた。そう彼は暴力を受けていた…痣だらけになっていて気を失っている…

「ヒ、ヒッキー!?」

「…」

思考は疑問と悲しみに溢れていた。

その時、私の中で何が弾けた気がする…起き上がれない比企谷君を担ぎ上げ保健室へと運んだ。ぼろぼろの比企谷君を見て由比ヶ浜さんは泣いている…けど私は怒りを滲ませていた。

彼はひねくれている。でも、本当は優しく頼りになる人だ。なのに…こんな仕打ちは…許せない

「あの人達…うちのクラスの…」

「待って、彼らの一人が言った言葉が気になるわ」
「えっ？」
　由比ヶ浜さんの発言で何かに気が付いた。告白の邪魔？あれは葉山君のグループと奉仕部でしか知らないはず…まさか…
「そう、そうなのね」
「ゆ、ゆきのん？どうしたの？そんな怖い顔して…」
　そうあの男は…過去に私だけではなく大切な彼…比企谷君いえ八幡を傷付けるのね？何がみんな仲良くよ。比企谷君を助けようとしない癖に…許せないわ
　まずは八幡を守らないと…早速だけど仲間を増やしましょう…
「由比ヶ浜さん。あなた、あのグループから抜けなさい」
「ど、どうして？」
「彼らの話から比企谷君の嘘告白について聞いたわ。この事知っているのは？」
「それはあたし達と隼人くん…あ」
「そう。あなたのグループの誰かが嘘告白の情報を広めたのよ…」
「ねえ…由比ヶ浜さん。あなたは比企谷君を…」

「守りたい？」
「う、うん。だってヒッキーはサブレを…」
「そうよね。私も彼に変えられたわ。姉さんの背中を追いかけて続けたけど私だけの道を照らしてくれたのは彼よ…そんな彼を傷付くのは」

「許せないわよね？由比ヶ浜さん…いえ結衣」
さあ、来なさい…あなたも彼を愛してるのならばこっちに来なさい
「うん…でもヒッキーは許してくれるかな？」
「大丈夫よ…私は彼を愛してる。結衣も彼を愛してるのよね？」
「ヒッキーを…愛する…あたしにそんな資格は…」
「大丈夫よ…きっと彼は受け入れてくれる…だから」

「彼を守りましょう…彼を愛しまょう…彼に愛されましょう」
「ヒッキーを守ってヒッキーを愛する…」
「そうよ。私達ならできる…だから彼を癒し危害を加える輩に鉄槌を下しましょう」
「…うんゆきのん。あたし目が覚めた気がする！そうだよ！あたしヒッキーの事好きだ

もん！ヒッキーの為なら何でもするよ!!」
「ええそうね。私もどんな事もしてあげられるわ…」
「「ふふ…あはは…あはははははははっ!!」」
待ってて八幡。あなたが認められる世界を作るわ。私の目的なんてどうでもいいわ。彼に愛されるのなら…手段を厭わないし情けも要らないわね。
それにしても寝顔は堪らないわ…ああ愛しい愛しい私の八幡…もう大丈夫…私達が守ってあげる。
ハチマンヲキズツケルニンゲンハミナゴロシニシテマデモマモラナッキャ

ｓｉｄｅ　結衣
「ふぇ～ヒッキーの匂い気持ち良いよぉ」
ベッドで寝てるヒッキーの胸に顔を埋めるあたし。あぁ～気持ち良いよ～今まで嗅いだことの無い良い匂いだよぉ。

ヒッキー…

もっと良い事したいけどヒッキーが起きた時にしたいな。キスもしたいけど…そうだ‼ヒッキーの頭を撫でて

「ねえねえゆきのん‼」

「あら何かしら結衣」

「ヒッキーから良い匂いがするよ‼」

「そうなの、ありがとう…すぅーはぁーええ八幡の匂いがするわ」

ゆきのんもの凄く気持ちよさそう…ちゅうどく？かなヒッキーってこんなに良い匂いがするんだ…それにしても許せないなーあの人達…でもどうしてヒッキーはあんな嘘告白を…姫菜の事好きって感じじゃなかったし京都から帰る時、ヒッキーと居なくなっていたし何か知ってるのかな？

「ゆきのん、あたし気になる事があるんだ…」

「なるほど…彼女を呼び出して頂戴。それと私にもやることがあるから任せてもいいかしら？」

「うん任せてゆきのん♪ヒッキーを守る為なら何でもするよ♡」
　あたしは修学旅行の本当の事を知りたい為にあたし達は動き出した…ヒッキーを守る…その目的の為に

　あたしは早速動いた…ヒッキーの事を何かしら知ってそうな姫菜を屋上に呼んだ
「何か用かな結衣？」
「姫菜…正直に言って…あたしが自分の気持ちを押し付けちゃったからさ…ごめんね」
「結衣…」
　あの依頼を引き受けるのは間違っていた…あたしはヒッキーに酷い事を言ってしまった。今日は学校を休んでいるけど安心して来られるように頑張らないと
　だから…
「それで…ヒッキーに何を頼んだの？」ハイライトオフ
「ゆ、結衣!?ど、どうしたの!?」
「ヒッキーはね心も体も傷付いているの…どうしてか分かる？」
「そ、それは…」
「ヒッキーの嘘告白が広まってるからだよ？ねえヒッキーはなんで姫菜に告白したの？どうして？教えて？ハヤクイエ」

「わ、わかったよ…結衣…あのね」

「ふーんそうなんだ…ヒッキーを利用したんだ…あたしが悪い部分はあったけどさ…」
「それはそれ、これはこれ…だよね？あたしは姫奈の事を信じられないよ…もうグループから抜けるから」
「ごめんね…結衣…本当にごめんなさい…」
「それはヒッキーに言ってよね…バイバイ海老名さん」
　あたしは捨てる…自分にも悪い所あったけどそれはヒッキーを利用して良い理由にはならない。姫菜を置いて次の事をしようと屋上から出たらすれ違い様にとある同期生に会った。ヒッキーに助けられた一人…
「雪ノ下から聞いたよ…アタシも混ざっていいんでしょ？」
「うんいいよ♪川崎さん」

ｓｉｄｅ　沙希

最近、アタシは比企谷が心配だ…文化祭で相模を泣かせたと聞いたけど何か理由があったと思う。というか相模は教室でくっちゃべっているだけだったし…そして、今日は休んでいる。男子たちの笑みが無性にムカついたけど…何かあったに違いない。アタシは奉仕部に訪れ二人から話を聞こうとした。

「失礼するよ」

「…待っていたわ。川崎さん」

奉仕部部長の雪ノ下…あの時は良いイメージを持たなかったけど。今は何か違う…

「由比ヶ浜は？」

「彼女は別件よ…ちょっとお話でもしないかしら？」

「別に…ただあいつについて」

「だから彼についてお話しましょう…」

座るよう促されて席について紅茶を飲んだ。一息ついた所で比企谷について聞いてみた。聞いてみると…まあ怒りが沸いた。雪ノ下と由比ヶ浜はとても後悔してあいつを守る為動き出してる。

「ねえ川崎さん」

「何さ」

「あなたは彼の事を好きかしら？」

「い、いきなり何さ!?ひ、比企谷はスカラシップで助けられたから…それに…」
「愛してるなんて言われたから…」
「(それは後で聞くとしましょう)」
「そうあなたは愛しているのね。彼を…ならあなたは知る必要がある…よく聞いて」

「何それ…あいつは誤解されやすいけどそんな奴じゃあ…‼」
「良かったわ川崎さん…ねえ川崎さん?」
「どうしたの雪ノ下…? 何か手伝って欲しいなら力を貸すけど」
「いえもっと大切な事よ…」

「沙希、こっちに来なさい」
「こっちって…」
「あなたは八幡の事をどう思う?愛してるの?守りたい?あなたの本心が聞きたい…聞かせて?」
「アタシは…アタシは…」

『愛してるぜサキサキ!』

「…好きだよ、愛してる…比企谷を助けたいどうすればいい？」
「大丈夫…焦っては行けないわ。今は彼を守る為に動いて頂戴…八幡を傷付ける輩から守って欲しいの頼めるかしら？」
「任せてそこらの奴よりは腕に自信があるから」
「ふふ、お願いね。そろそろ屋上に行けば真実までの糸口が見えるはずだから行ってみなさい」
「分かった」
　アタシは雪ノ下に教えられた通りに行くと…成る程そういう事…由比ヶ浜とすれ違い。アタシは海老名に近付いて見下ろす
「…アンタさ、どれだけの事をしたか分かってる？」
「…うん、でも比企谷君なら大丈夫だって思ったし隼人君が何とかすると思ったけど…」
「あいつ何もしてないけど？比企谷はリンチに遭って今日は来てないけど？どうしてくれるの？」
「ごめんなさい…ごめんなさい…ごめんなさい…ごめんなさい…ごめんなさい…」
「ま、元の生活は送れないと思うよ…アタシもアンタの事許せないから」
　待ってて比企谷…いや八幡…あんたが平和に暮らせるようにして置くから…それに

してもリンチにした奴絶対に許さない。本気で殺したいけど…取り合えずあいつん家に行ってお見舞いに行かなきゃ…そうだ、愛してくれると言ったくれたって事は…

アタシは付き合っているんだよね？これじゃ彼女みたい…いや満足しないね。そうだ奥さん…八幡の奥さんなんて…素敵…しっかりお世話しないとね？だってアタシは八幡の奥さんなんだもん

ｓｉｄｅ　めぐり

最近、比企谷君の悪い噂が流れてる…告白を邪魔したってそんな子じゃないと思うけど…何か助けになれないかな？思い切って奉仕部に足を運んだ。

「雪ノ下さんいるかな～？」

「城廻先輩…待ってましたよ来るのを」

「？ちょっと聞きたい事があってね時間良いかな？」

「はい…何でも」

「「比企谷君の噂についてだけど」」

「え!?」
「ふふ…分かってましたよ…あなたが私に聞こうとしてる事を…よく聞いてください城廻先輩…」
　私は話を聞いて驚いたそんな事になっていたなんて…それにしても許せない…彼は泥を被っても文化祭を成功させてくれたのに…
「城廻先輩…ちょっといいですか」
「雪ノ下さん。出来る事はない？その話を聞いてね比企谷君を助けたいの？どうすればいいのかな？彼のような人を傷付ける人は許せないんだよね…どうすればいいかな？」
ハイライトオフ
　あの時に…比企谷を罵倒してしまった…今こそ彼に恩とお詫びをしないと…比企谷君いや八幡君のような正しい人をあんな目に遭わせる人なんて
　ここには要らないよね？
「なら、一つお願いがあります。そうすれば…」
「うん分かった任せてね♪」

ｓｉｄｅ　陽乃

突然雪乃ちゃんから連絡が来て話を聞いて見ると…隼人がまた馬鹿をやらかしたらしく更に比企谷君がイジメに遭っているという。隼人はどうでもいいけど比企谷君がイジメられてるの気になって雪乃ちゃんから詳しく聞くと…もう呆れたしそれに隼人に怒りが滲んだ。

「ふーん…そうなんだ…隼人ね…やっちゃったね」

『ええ海老名さんから聞き出した事を裏付けしたいから…協力してくれる?』

「勿論いいよ。私もその輪の中に入れてくれるなら…ね」

『八幡の事を正しく知ってる姉さんなら歓迎よ…葉山君から話を聞いた翌日に実行したいの…』

「大丈夫…隼人は私に嘘は付けないから。ちゃんと聞いておくね。それにしても雪乃ちゃん変わってねぇ。どうしたの?」

『私は彼に救われて私にとって大切な人…その人が傷付くのなら…助けるのが当たり前でしょ?それにあの男は私を二度も裏切った…私は八幡を守るなら何だってするわ。その覚悟もある』

「そう分かった。後はお姉ちゃんに任せなさい♪」

雪乃ちゃんとの電話を切ってあの馬鹿を呼び真相を話させる。隼人…結局は成長し

ていないんだね…みんな仲良くを掲げている癖にいざとなったら切り捨てる…雪乃ちゃんの時も比企谷君も結局は今の立場を失いたくない自分可愛さに走る。聞けば比企谷君が酷い目に遭っているのにヘラヘラと笑って過ごしてるようだね…

「何のご用ですか？陽乃さん」

「聞きたい事があってね～比企谷君の状況についてだけど…」

「えぇ、心が痛いです…俺に何かできる事はないですかね？」

「そりゃ簡単だよ。隼人がね」

「修学旅行の真実を言えば良い話だよ？」

「!?そ、それは…!!何でそれを!?」

「比企谷君を助けようとする雪乃ちゃんとガハマちゃんがあんたのグループの海老名という娘を問いただして知ったようだけど？あんたは何か言う事は無いの？」

「…」

「困ったらだんまりとはね…あんたさ…自分がした事の大きさって理解してる？」

「してるさ!!だから俺はこの状況を…!!」

「できないでしょ？あんたは少数を切り捨てる人間だからね。雪乃ちゃんの時がそう。あれでしょ周りから失望されるのが怖くて言えないんでしょ？言ったら自分の失態が

バレるから」
「くっ…」
「何その顔…一番辛いのは彼なのよ!?ふざけてるのも大概にしなさい卑怯者!!もうあんたの顔なんて見たくないから…明日何も起きなければいいね」
「ま、まってください!!な、何をするんですか!?陽乃さん…!!陽乃さん!!」
　隼人が呼び止めるけど無視して雪乃ちゃんのマンションに寄った。ここには比企谷君いえ八幡君に救われて好意を持つ女の子が集まっていた。雪乃ちゃん、ガハマちゃんに川崎ちゃんとめぐりもいた。そうか、めぐりも気付いたんだ彼の魅力に
「姉さんどうだった?」
「思ってた通り…もう救えないね隼人は…ガハマちゃんはいいの?」
「ヒッキーの事が大好きなんで…ヒッキーの考えを利用した二人を許すつもりなんてないです…あたしはあのグループを捨てる。そしてヒッキーと一緒に居る!!」
「そっか、でも独占は許せないよ?明日決行だね…」

「八幡を傷付けた連中に恩返ししなきゃね♪」

重い思い　中編　グループの崩壊

ｓｉｄｅ　葉山

陽乃さんに修学旅行の真相を知られ、今日何が起きるか分からないまま学校に来てしまった…比企谷は来てなかった。それと珍しく結衣がまだ来てないどういう事だろうか？もしかして…何かするつもりなのか？段々とクラスメイト達が教室に来るけど相変わらず結衣の姿は無い…教室に来た川崎さんが俺の事を睨んでいた。まさかとは思うが…陽乃さんはもう動いたのか？不味い…不味すぎる‼

暫くして結衣がやって来て挨拶をしたら無視された…それに優美子が喰らい付いた。けど結衣は何も思っていないような表情していた。まるで俺の存在を無視しているようだ。

「ちょっ結衣‼何で無視してんの‼」

「あー優美子、おはよー。何か用？」

「だから…‼なんで隼人を無視するし‼結衣、今日おかしいし‼」

「おかしいのは…」

本当に結衣なのか？優美子の剣幕に動じず無表情なまま受け答えをしている…

「何時までも本当の事を話さない隼人君じゃないの？」
「…何それ？真実って何の事だし？」
「海老名さんに聞けば分かるよ。それとあたしこのグループから抜けるから」
「えっ結衣どうしたの!?本当にどうしたんだし!!何が起きてるの…ねえ姫菜何か知ってるの？」
「それはね…」
「海老名さん駄目だよ。まだ言っちゃったらそれと放課後奉仕部に来てくれないかな？」
　このままでは優美子達に知られてしまう！何とかして逃げる理由を探していたら携帯から通知が来る。開くと…
『逃げたら駄目だぞ♡』
　陽乃さんからのメールだった完全に逃げ場を失った俺は諦めて奉仕部に向かう事になった。その先に何が起きるのかも知らずに

「なんだべや。ゆいっち」
「それな」
「だな」
「…」
「姫菜どうしたん？具合悪いの？」
「大丈夫だよ…大丈夫」
　姫菜は分かっているんだ。何が起きるのかを…俺は放課後まで祈っていたが…無駄だったようだ。重い足取りで奉仕部の部室に行くと…そこには雪乃ちゃん、結衣、川崎さん、城廻先輩がいた…四人共真っ黒に染まった眼で俺達を睨んでいた…結衣でさえも
「来たのね…葉山隼人」
「雪ノ下さん…」
「名字だけでも呼ばれるのは非常に不愉快だわ…存在自体も不愉快だけれども」
　名字ですら拒絶されるなんて…ここまで…俺はひょっとして
「雪ノ下さん…あんた…」
「あなたは黙って頂戴三浦さん」ハイライトオフ
「ひっ!?」
　取り返しのつかない事をしてしまったのだろうか？

「そうだね…優美子…黙って？」ハイライトオフ
　前の結衣の姿からは考えられないぐらい怒気と殺気を感じそれを優美子に向け怯ませる。
「ゆ、結衣…」
「結衣！優美子とは親友じゃなかったのか‼どうしてそんな態度を…」
　本当に結衣なのか？優美子や姫菜に対しても他人行儀だ。俺は結衣を止めようとするが川崎さんの指摘に遮られる。
「アンタが言える事？八幡を利用しないとグループを守れなかった男がそんな台詞を吐くんじゃないよ…聞いてるだけでイライラする…」
　確かに俺は戸部と姫菜な依頼を受けた…けど手に負えず比企谷に任せてしまった。何とかしてくれるって…
「そうだねー文化祭の時も…何時になったら言うかな？噂を広げないようにしてたけどさ…真実を言えば良いんじゃないかなー？」
「…ねえ聞いてれば何？真実って何？あーし全然分からないし」
「じゃあ言うね。優美子…文化祭と修学旅行の真実」
「待て‼それだけは‼」
「何で止めるの葉山君？」

「言っちゃいなよ。由比ヶ浜…下手な真似したら叩きのめすから」
「私も喜んで加勢するわ」
　もう詰んだのか…俺は？いや諦めるな‼何とか説得すれば…‼まだ知られる訳にはいかない
「ひ、比企谷がいる時にしないか？」
「それは駄目だよー？だって八幡君にとってこの学校は危険だからねー」
「前あいつリンチされてたんだよ…来れる訳ないじゃん馬鹿じゃないの？…そこの二人が間接的に関わってるようだけど？」
「そういう事よ…そこの優柔不断な大男さんと風見鶏さん？あなた達ね嘘告白を広めたのは…覚悟なさい恨むならそこの男を恨みなさい」
「ということで早く言いな？ニゲラレルトオモウナ」
「わ、分かった…全部話すよ…」
　逃げられない俺は全てを明かした…優美子は俯き大岡と大和は青ざめていた…彼女達は俺を見下したり殺しそうな雰囲気だった。
「…ということだったんだ。けど信じて欲しい。俺は比企谷を貶めるような事は考えていない‼」
「私はあなたの言い訳なんてどうでもいいわ、それで真実を知ったあなた達はどうする

のかしら？」
「あーしは…」
「三浦さんあなたは被害者よ…この男は信用できる？」
「優美子信じてくれ‼俺は君に迷惑をかけたくないからそれで」
　頼む‼せめて優美子だけでも‼
「ごめん…隼人。信じられない」
「どう…して…？」
　返ってきた答えは予想とは真逆だった。
「だって何で隠してたの？するべき事をヒキオに擦り付けて…最低だししてる事が…でも姫菜どうしてこんな事をしたの‼」
「だ、だって…隼人君じゃ何にもできないし比企谷君なら出来ると思って」
「でもしてる事は隼人と一緒だし…それにあんたら‼」
「「!?」」
「戸部…あんた恋愛舐めすぎ。それにヒキオを馬鹿にしてたの？それに姫菜の事をちゃんと考えていたの!?どうなんだし‼」
「お、俺は真剣に…」
「…戸部っちさ。ただ彼女が欲しいからじゃないの？誰でも」

「そ、それは…」
「私ね…いつか抜けようと思ったのこのグループ」
「戸部っちが比企谷君を弄って時を見て無いなと思ってたよ」
「…」
「それにね。チェーンメールの犯人いるんだよね？大和っちか大岡っちに」
「そうなの!?」
「そうだよ優美子…隼人君は知ってるけど」
「姫菜…？」
「比企谷君を苦しめたんだよ私達…それにね。あんなメールを書くような人と居たくなくなったよ…だから嘘告白の事を広めるような事ができたんだよ」
「ありがとう海老名さん。色々と話してくれたあなたは見逃すわ…今回は。次は容赦無くコワシテアゲル」
「姫菜…？」
　まさか…修学旅行の真実を彼女達に教えたのは…姫菜だったのか？俺を裏切ったのか？
「ごめんね隼人君。でもこれが人の本質だよ」
「姫菜!?どうして…」

「だって…このグループと私の立場を考えたらね…」
「君はこのグループが好きなんじゃ…」
「それは昔の話。嘘告白を広めた事とチェーンメールの犯人を知ったら…居たくないよこの人達とは」
　姫菜の真意を知りグループの皆は呆然とする。姫菜がこのグループを去りたかったなんて…戸部に関しては目の焦点があっておらずふらふらした足取りで部室から出て行ってしまった。誰も止めることはなくすれ違いで…
「ひゃっはろー!!」
「あら姉さん終わったのね。お掃除が」
「うん終わった終わった♪八幡君に暴行したゴミは消しておいてオハナシしてたから！もういないよ」
「陽乃さん!?それってどういう事何ですか!?」
「ちょっとしたお仕置き…高校に入ってこんな事をする方も大概だしね…もう何人かは退学処分か警察のお世話になったよ」
「なんでそんな事を…」
「いい加減にしないと殺すよ隼人？警察が関与するぐらい酷かったってこと。後、ゴミに真実を教えたらあんたに一言言っていたよ」

「な、何ですか？何を言ったんですか？」
「よくも騙してくれたなって、それはそうだよね？あんたが文化祭と修学旅行の真実を話せば彼らは加害者に八幡君は被害者にならなかったからね。つまり、あんたの所為で多くの人間の人生を狂わせた…早く言っちゃえば良かったのにね」
「みんな仲良くを聞いて呆れるわね…あなた。その癖に八幡を助けようとしない今までの恩を仇で返す最低な屑ね。そして、事態を軽く見てる…まるで成長していないわね」
「ヒッキーが辛い目に遭ってるのに隼人君笑って過ごしていたよね？あたしは心苦しかったのに…ヒッキーがどんな目に遭ってから知らないなんて…どうしてこんな人友達になったんだろ？」
「アンタ無責任だね。葉山失望したよ…今のアンタは皆の葉山隼人なんかじゃない。只の卑怯者の屑だよ…自分の地位を必死に守る悪い政治家だよ…それに比べて八幡は助ける時は助けてくれる。例え泥を被ってもね」
「私も失望したかなー。文化祭の時、相模さんを推薦したのは葉山君だよね？良い迷惑だったよ？君にも間接的に関わってるからね？どうしてそんな無責任な行動が取れるのかな？」
「ということで海老名ちゃん♪」
「はい…分かってます。明日、クラスの皆に真実を話します…」

「そうそう素直で良いよ♪お仕置きは無しにしてあげる♪それと大和と大岡だっけ？二人は部活の顧問に話しておいたから多分、噂を広めて八幡君のイジメを加速させたとして学校に知れ渡っているかもね後、隼人は比企谷に接触しちゃ駄目ね？だって疫病神だから…じゃあね♪」

「…」

二人の顔に生気が失った…そして、俺は全てを失ったかもしれない。大岡と大和は部活にも迷惑掛けて追い出されたらしい。大和に限ってはチェーンメールの犯人として更に孤立して誰も彼に話し掛ける人はいない。次第に学校に来なくなった…

姫菜は俺を見限り「お仕置き」から逃れる為俺を売った。戸部は俺を信用できないと言われ距離を置かれた…優美子もだ…

「お前は何を考えているんだ!!隼人!!」

「父さん!!聞いてくれ!!」

「無駄だ!!どう言い訳しても彼の立場を悪くさせたのはお前だろうが!!もし亡くなったらどうするつもりだ!!遅かれ早かれ真実は明るみになりお前が間接的に関わってる事が明らかになるのだぞ!!」

「それでも俺は…!!」

「もういい…この馬鹿息子が!!どうして悪意を信じない!!何故、彼を助けなかった!!ど

うして保身に走った‼それが弁護士を目指す者が取る行動か‼」
父さんに叱られた俺は坊主頭にされた…こうして孤独になった。俺は彼女達の怒りに知らず知らずの内に買い…全てを奪われた…
けど諦めきれずにあの日、比企谷にグループの再建を依頼した…孤独が辛かったから。確かに姫菜に裏切られてしまったが彼女も大和達も含めあの頃に戻りたかった。俺はすがるように頼んだが…拒まれて陽乃さんに接触をバレてしまいこの様だ…転校先の学校の屋上に座る俺は後悔していた。
「俺はどこで間違えたのだろう?」
その問いに誰も答えない。今思うのは彼女達から蔑まれた言葉を思い出すと姫菜の裏切りを思い出す…よく考えれば俺は「みんなの葉山隼人」を演じるが故に大切なナニカを見逃してした部分があったな…チェーンメールの件の解決しようとしなかった事…俺はグループの事を深く考えていなかった。確かに近くに悪意があるのは…文化祭も相模さんを推薦した結果、比企谷の立場を悪くさせた。修学旅行で更に比企谷を嘘告白させてしまい危険な目に遭わせてしまった。俺は責任を気付かず逃げていたんだ…だから…
何がみんなだ…俺はメンツを守る為に比企谷を犠牲にしていた…漸く分かった…全てを失って気付くのか…

「俺は…何もできない…ちっぽけな人間だったのか…肝心な所を見逃して…」
新たな我が家に帰ると比企谷から電話が着ていた…俺は千葉を去る際に陽乃さんが何かを企んでいた気がする。せめてのも償いだ…俺は知らせないといけない彼に

大和と大岡は…
「俺達が築き上げた物を壊しやがって‼」
「お前がそんな奴とはな…もう顔も声も聞きたくない」
「…あの人頭悪いよな。というか見損なったぜ」
「お前の所為で秋の大会に出れねえじゃん‼ふっざけんな‼もう来んなここに‼」
「俺は悲しいぞ…レギュラーのお前がそんな事をしていたなんてな」
今回の件を部活の先輩、後輩、同級生に後ろ指を指され顧問からの信頼を失い
「あいつら最低だよな…」
「大和ってチェーンメールの犯人らしいよ?」

「だから噂流してイジメなんか悪化させたんだな…最低じゃん」
　同級生からも蔑まれ孤立し次第に学校に来れなくなった…二人は葉山を恨んだが…それはただ八つ当たりに過ぎなかった。
　戸部は…
「戸部大丈夫か？」
「あぁ…大丈夫…」
「暫く休めよ…落ち着いたらな？」
　ある意味被害者の戸部は精神的に苦痛だったが…部員たちに支えられ少しずつ立ち直っている
　優美子と姫菜
「優美子…構わないで…私は最低な人間だから」
「かんけねーし、あーしは姫菜を支えるから…だからもう隠し事は無し。分かった？」
「分かったよ…これからは頼りにしていいかな？」
　姫菜はグループを裏切り孤独でいようとしたが優美子は見捨てる事はせず彼女を支えようとしている。
「俺にできるのはこれぐらいしかないな…戸部、三浦、海老名さんだけでも…後は相模

か」

重い思い　後編　文化祭の真実と…

ｓｉｄｅ　雪乃

ゴミの片付けは粗方終わったようね…八幡を暴行した屑共も処分も終わった。これで安寧が訪れるわね…

「ゆきのんまだいるよ」

「あら誰かしら？」

「さがみんだよさがみん…どうする？」

「ああ…彼女ね…そういえば彼女に利用された挙句…八幡の悪口を広めた馬鹿ね…どうしてあげようかしら？」

「簡単だよ‼さがみんなんてちょっと言われるだけで泣いちゃう泣き虫さんだから」

「そう…なら始めましょうか」

何って？文化祭の真実を晒すだけよ？簡単な事でしょ？覚悟なさい相模さん…あなたが望む全てを壊してあげる…

「それでは城廻先輩後はお願いします」

「はーい任せてねーじゃあ皆…始めるよ？」

翌日…

「みんなどうしたのー?」

ヒソヒソ

「うわきたサボり委員長」

「今までよく嘘を付いてられたよな…」

「退学したあいつはあんな奴の嘘で踊らされたのか…」

「え?何々?何が起きてんの!?」

「さーがみん♪」

「結衣ちゃん?」

「もう終わりだねさがみん‼」

「な、何を言ってんの!?うちが終わるって…」

『相模南さん至急職員室に来てください』

「えっ…なんなの…何が起きてるの!?」

ふふ…うろたえなさい…怯えなさい?あなたの終焉はそこまで来てるわ

「さてここに呼んだ理由ですが…相模さん」

「は、はい…」
「あなたは文化委員長でありながら仕事を疎かにし比企谷君に嘘の情報を流しイジメを助長させていましたね？」
「そ、その証拠はあるんですか‼」
「証拠も何も…この出席表とあなたの友人二人が教えてくれましたよ？」
「え？」

「無様ね…相模さん…」
「雪ノ下…さん…？どうして!?何でウチがこんな目に…‼」
「あら？八幡を悪く言った上に私に仕事を押し付けた事…そして、友達の結衣を嘲笑った罪を受けて貰っただけよ」
「あぁ…そ、それは…」
「今の私にとってあなたはたんこぶのような障害だったけれど…文化祭の時の依頼を思い出してね」
「あ、あれは…」
「成長…だったかしら？文化祭で学ばなかったから今…学ばせてあげるわ…彼が味わった痛み、私が受けた苦しみ、見下した彼女の思いを味わいなさい。二度とあなたがちや

ほやされる事はないでしょうにね」
「いやぁ…いやぁ…いやぁぁぁぁあああああああああああああ‼」
その後、相模は孤独となった…明らかになった文化祭の真実。これにより彼女だけでなくサボり組のメンバーも糾弾されていった。こうも噂が広まったのはめぐりとめぐりを慕う者達が真実を広めたのだ。信憑性を持たせる為証拠として文化祭の出席簿が掲示されたのだ。因みに陽乃は自分の発言で八幡を苦しめた事を思い出し吐血と精神ダメージを喰らった。めぐりも八幡を否定してしまった発言を思い出し唇を噛み切っていた。

side　八幡

今日は戸塚が見舞いに来てくれた。今日もクラスの状況を教えてくれた。
「雪ノ下さん達…今度は相模さんを…」

「そうか…葉山の次にあいつが潰されると予想してたが…」
「でも…僕はね…これでよかったと思ってるんだ」
「戸塚？」
「だって…人に責任を負わせるという事が容認されるような人がいるんだよ？もしかしたら…次は僕かもしれないし他の人だったかもしれない。葉山君から言われると…誰も断りにくいから」
　確かに…葉山という存在は偉大だろう。頼まれると喜んで引き受けるだろう…あれヒーロー？まあいい
「そう…か…まあ、あいつも考えが浅はかだったんだろう。それに関しては…俺もあいつが何をしたかったのかは分からない」
「八幡…」
「でも自分ですべき事から逃げるのは許されないのは確かだ…あいつはそれから逃げた…さて、俺も動かないとな」
「何をするの？」
「雪ノ下達がひと暴れしたからな俺が行きやすくなったはずだ。でも…ある意味被害者の戸部と三浦を助けたい。協力してくれるか戸塚？」
「うん、僕でよければ力になるよ。僕は何もできなかったから…」

「俺は責めねえよ…あの時はしょうがないからな」
「うん…」
後日、俺は数日ぶりに登校した。殆どの生徒が俺から離れていた…まあ動きやすいからいいか絡まれる事はないだろう。俺は早速、サッカー部に訪れ戸部に会っていた。会ったらで謝ってきたが取り敢えず心境を聞いてみた。
「誰も信じられないんだべ…隼人君は俺が振られる事を知っていて…もう…」
「海老名さんはどう思うんだ?」
「俺の思いを押し付けて悪かったって思ってるっしょ…」
「そうか…今は部活の仲間を信じろ…支えてくれるんだからよ」
サッカー部の連中に説明して戸部を任せる事にした。次は三浦に会いに行った…
「何の用ヒキオ?」
「お前は大丈夫なのか?」
「あーしは…ちょっとだけ平気でも…姫菜が」
「多分罪悪感だろうな…俺は大丈夫だからそう伝えてくれ…三浦お前は海老名さんを支えたいのか?」
「勿論だし!もう一人で抱え込ませないし…今度から」
「分かった…俺も協力するから」

この会話から後日…三浦は海老名さんの事を良く気に掛けるようになった。彼女から謝られたが気にするなと言っておいた。グループに居たより仲が深くなってる気がするな

後は相模だ。相模は糾弾されたサボり組からもバッシングを受けていた。醜い光景だった…俺は間に入りそいらにもサボる事に疑問を持たなかった事を指摘した。それで黙ったがな…相模は晒し者にされて自分がどれだけの事をしたかを分かったらしい…その後、助けてくれた事と文化祭の事を謝って来た。俺も罵倒した事を謝ってお互いに水を流した…

そして、俺は葉山に電話をかけ続けるとやっと出てきた。今、雪ノ下さんが風呂に入ってるんだ…手短に話さないとな…しかし、葉山の口から伝えれた真実に俺は後悔するのはまだ知らなかった。

おまけ

「は、八幡…ごめんなさい…ぐふっ」ボタボタ

「姉さん自業自得よ」
「ちょっとは心配して?」血を吐きながら
「…」ブチッ
「め、めぐり!?唇から血が出てるよ!?」

彼は狂愛にまた浸食される

ｓｉｄｅ　八幡

「…」

聞いてしまった。ここに雪ノ下さんが居なくて風呂に入っている事が幸運だった。俺は葉山から聞いてしまった。彼女達の行動…目的…それは『花園計画』。詳細は不明だが…雪ノ下さんが企んでる計画だ。

「俺を…どうするつもりだ?」

兎に角俺は大きく関わってるのは確かで俺という存在を欲している。だけどそこに俺が求める本物はあるのか?あんな狂った愛情に本物が存在するのか?いや…どうすりゃいいんだよ俺は…

「は～ちまん君♡」

「ゆ、雪ノ下さん!?」

バスタオルだけ巻いた雪ノ下さんがそこにいた。シャンプーの香りと雪ノ下さんの体付きで思わず見とれてしまう。それにしても寒くないのだろうか?

「さあ一緒に寝よ♡今日は寝かさないｚ」

「おやすみなさーい」ガチャバンカチャ

ここで緊急回避を発動させマイルームに避難。バスタオル巻いただけの雪ノ下さんがそこにいた。

「…八幡君？あの入れてくれない？お風呂上りだから寒いな～お姉さん～」

「はいはーいこっちですよー」

「あの小町ちゃん？小町ちゃん？」

ファインプレーだマイエンジェルシスター小町。ゴールデングラブ賞確定のプレーだったぞ。今度どっか連れてってやるからな。それにしても良かった良かったこれで俺は平穏に寝れるし雪ノ下さんも風邪引かないし今夜は平和に寝れそうだ。お休み

そして翌朝、風邪を引きかけた姉乃下さんを置いて学校へ向かう。由比ヶ浜と川崎に穴を開けられそうな視線を受けつつ放課後まで無事に生き残る。今日は奉仕部の活動が無く生徒会の手伝いに行く事になった。

「いや～緊張します～せんぱ～い」

会長は言わずもがなこいつ一色いろはだ。生徒会選挙は一色が勝利し恥をかかせようとした女子達の目論見は見事に裏切られたのだ。めでたく生徒会長となった彼女の初仕事は海浜総合高校との合同のクリスマスパーティーの開催だ。俺達奉仕部はそれの助っ人として参加する事になった訳だが…

「あっ比企谷じゃんこのまえ振りじゃん」
「折本…」
　あいつ海浜総合の生徒だったのかよ…この前みたいな小馬鹿にした態度ではなく何やら聞きたそうな表情をしていた。雪ノ下さんのインパクトは凄かったようだな。俺もあの時は流石に肝が冷えたぞ。
「何だい知り合いかい？それじゃあ会議を始めようじゃないか」
　海浜総合の玉縄の掛け声で会議が始まったが…色んな専門用語だらけでちっとも進む事はなかった。ホント何を言ってるか分からない。あっちの世界にでも行ってんじゃねえのか？休憩となりさっきの会議とは言えない会議に頭を痛めつつマッ○ンを飲み干す。
「ねえ比企谷ちょっといい？」
「おういいぞどうした？」
「この前の怖い女の人って誰？」
「あーあの人か…そうだなこの世で誰よりも怖く強く手段を選ばない人」
「何それ…ウケないんですけど。どんな関係？付き合ってるとか？」
「…聞くか？」
「ちょっと気になるというか」

それはめっちゃ気にしてるという意味だぞ折本よ…

「…俺という人間、俺という存在を手に入れようとする人だ。それまでの経緯を教える。まずはな…」

俺は折本に彼女達と狂った日の事を教えた。修学旅行の嘘告白、その後いじめられて彼女達が俺を守る為に狂愛に走った事、海浜総合でも有名な葉山の末路…今までの事を全て話した。折本は恐怖に怯えた表情している

「狂ってる…狂っていすぎでしょその娘達…比企谷は逃げないの？」

「逃げれない…な。多分どこまでも追ってくんじゃないか？それに下手な事をしたらギリギリの理性が吹っ飛んでどうなるのか…想像もしたくない」

「うわっ絶対絶命じゃんそれ」

「その通りだ。だから耐えるしかない…僅かな可能性に賭けて元に戻るまでな」

「なんか逞しいね比企谷」

「別に…というかあの会議どうすんの？あんな調子じゃ間に合わねえぞ？」

「あーそれねーなんか、いつもあの調子なんだよね何言ってるか分からないけど」

「安心しろ俺もだ」

折本のやり取りを終えて尚会議は続いたが進展も無く解散となった。一色達と別れた後コミュニティーセンターを後にして暫くすると

「あっヒッキー！」
「ご苦労様八幡…さあ帰りましょう」
「お、おう」
　他校の生徒かうちの学校の生徒かは分からないが道行く人々は俺達に注視する。そりゃ冴えなそうな腐り目の男がこんな美人と二人も腕を組んでいるんだからな。でもなこの状態はな俺にとって拘束なんだぞ？おいそこのお前交換してやろうか？ドロドロの修羅場を覚悟すんだな
「何か余計な事を考えていないかしら？」ジー
「いや別に…」
「…」スンスン
　雪ノ下の問い詰めをはぐらかす間、由比ヶ浜は俺の服を掴み匂いを嗅いでいる。それはせめて家でやって？家でもされたくないけど
「ねえヒッキー…」
「なんだよ…もう満足か早く行くぞ」
　ガシッ
　腕を掴まれる。その手にはとんでもない力を宿していた…ってめっちゃ痛い!?お前そんなキャラじゃないだろ！下を向いていた由比ヶ浜の顔が徐々に明らかになり…

狂犬のような眼で俺を睨み怒気が孕んだ声が聞こえた。
「ヒッキーさぁ…どうしていろはちゃん以外の虫(女)の匂いがするの？どうして？コタエテヒッキー」ハイライトオフ
「ワタシモクワシクキキタイワネ。マサカウワキカシラ？」ハイライトｒｙ
なんでこうなったし必死に弁明して許しを乞えた俺は何されるか分からないまま帰宅し二回目の尋問を受けて今夜一緒に寝るという事になった。小町はマジギレだったが…就寝しようにも四六時中頭が比企谷菌に感染し狂気と発情しているこいつらに隙を見せる訳にいかず全く寝れなかった。由比ヶ浜がさりげなく当ててきたり雪ノ下が胸に頭をうずめてきたりして理性が飛びそうだった。お願いだから寝かして？まだ魔法使いでいたいの

とある日、クリスマスパーティーの協力を乞う為近くの保育園に顔を出しに…何故か

川崎が付いてきたがな。保育園の先生に話を伺おうとしたら
「さーちゃん！」
　川崎の髪と同じ女の子が川崎に抱きついて来た。そういえば妹がいるって言っていたな。この娘が妹なのか。
「紹介するよ。妹の京華だよ」
「よろしくな京華ちゃん。俺は比企谷八幡だ」
「はち…まん…」

「さーちゃんの旦那さん」
「ぶほぉあっ!?」
　吹くわこんなの。目を丸くして川崎を見る。母性溢れる笑顔で京華を抱き上げ
「そーだよけーちゃん。さーちゃんの未来の旦那さんだよ」
「さーちゃんの旦那さんがはーちゃん？」
「そう。今日から家族…」
「待て待て待て待て待てべ〇カー家よりはマシかもしれないけど。それはそれで怖いし駄目でしょ」
「え、どこが？」

「もう色々だろうが!?」

一色は「うわぁ…」とドン引き。ここって保育園だよね？なんでこんなドロドロした展開になってんのさ！もし川崎家公認だったらマジで逃げ場が存在しないぞ！最近俺の逃げ道が無くなっているのは気のせいか？気のせいであってくれ

という事が起きてまた海浜との会議に参加。雪ノ下さんの計画といい雪ノ下と由比ヶ浜の睡眠妨害といい川崎の未来旦那宣言といい話が頭に入らん。もうどうにでもなーれ…そんな訳にも行かず。玉縄に今後の対応を話し合って進展もせず。席に着く…くそ…彼女達の狂気で精神が擦り減り進まない会議にイラつき体も疲れ切っている…どうすりゃいいんだよ。

「あれ…八幡？」

「え…留美？」

小学生が来てるかと思えば千葉村で出会った鶴見留美がそこにいた。留美は俺だと分かると飾りを作る道具を手放して俺に抱きついてきた。流石に気まずいので場所を移した…袖を掴んで顔を赤くする留美を連れて。その時俺は思った…まさか留美も？なんてな流石に小学生の彼女がな…場所を屋上に移して道中で買ったココアを留美に渡してベンチに座った

「久しぶりだな留美」

「うん…あの時はありがとう」
「まあ気にすんな。それにしても分かったなお前」
「アホ毛にその目…すぐに分かった」
「そうか」
　あれ至って普通だな…まあよかった。留美は狂気に染まっていないようだな…異性の知り合いにまともな奴はいないからな。留美がまだ普通で…せめてこいつだけでも…後で忠告するか今の雪ノ下と由比ヶ浜に近付く事を。留美を狂愛に支配される前にな。ココアを飲み干した留美はベンチから立ち上がった。どうしたんだ？と思って顔を覗いた。
「ねえ八幡」

顔を覗いた。その時は俺は後悔した。何故か、て?だってよ…口元はにやりと笑って生気のない目。この目は…

期待は見事に砕けた。せめて留美だけでも正常でいて欲しかった俺の希望は地の底の闇へと飲まれた。

「例えそんな特徴無くても八幡ならすぐに分かるよ?だって八幡の匂いってすぐ分かるし。それにあの時から八幡の仕草とか分かるようになったよ?凄いでしょ。でもね足りないの…私はまだ小学生だから知らない事が多いけど八幡の事はもっと知りたい。八幡は私にとって王子様だしヒーローだから…／／／それに自分の身を顧みずに助けようとしてくれるからもっと好きになっちゃった♡千葉村にいた金髪のお兄さんはかっこよかったけど八幡の方が１００万倍かっこいいよ?だってあの人、余計な事しか

しないし私の立場を危うくさせようとしてたもん。それに頼んでいないのに話し合いさせて仲良くって…そんなで仲直りなんてできないのにあの人馬鹿だね。後、雪乃さんから聞いたけど八幡を利用しようとしてたんでしょ？八幡に助けられていながら都合良く利用しといて自分の地位だけを守ろうとする人…最低な人だね。もういないって聞いて清々した。これで八幡ともっと仲良くなれるね♡だって邪魔者はいないんだから。今ねお母さんと一緒にお料理とかお裁縫の練習してるの花嫁修業をしてるんだ。私ね夢があるの…それはね…」

「八幡の奥さん♡素敵でしょ？ねえ八幡」

留美の熱弁に俺はベンチから立ち上がり後退りしてしまう。留美はそんな俺の姿を見ながらも熱弁を止める事なくゆっくりと一歩ずつ俺に歩み寄る。小さな少女に宿ってしまった狂愛は高校生を震え上がるには十分な恐怖だった。留美に追い詰められ金網に背を預けてしまう俺。そんな俺を見て留美は微笑みながら小さな両手で俺の頬に

添える。真っ黒で光沢の無い眼をして…そうだこの目は紛れもないあの目。
「大丈夫だよ八幡…今度は私達が守ってあげるね？ずっとずぅーーーーーと一緒だよ♡幸せになろうね私達皆で」

おぼつかない足取りで会議室に戻る。本牧が心配してきたが大丈夫と言って席に着く。玉縄や一色、折本が話し合っていたが…何の話だったかは覚えていない。ただ一つ確かな事は１２歳の少女が狂気と愛に身を溺れさせたという事だけだ。
後日、雪ノ下と由比ヶ浜に川崎、城廻先輩、雪ノ下さんも会議に参加。後で一色に確認した所、玉縄を逆論破しあれよあれよと計画が進み。クリスマスパーティーが無事に開催される事になった、と…仕事を達成した動かない会議が進み開催までにこじつけた。でも俺の心は晴れる事はなかった。

それから…時は元旦まで進む

「姉さん計画の方は？」
「問題無し。留美ちゃんの一仕事で八幡君は陥落まで後一歩だね」
「陽乃さんこれであたし達みんな幸せになるんですよね♪」
「そうだよ。八幡君と彼を愛するだけの世界ができるから…雪乃ちゃんもガハマちゃんも沙希ちゃんもめぐりも留美ちゃんも私も…」
「はるさん…楽しみです！私はもう…我慢できないですよ♡」
「だーめ。まだだよめぐり？さてもう一押しは…任せるね」

彼が選んだ未来は…

元旦の数日前

「…」

「お兄ちゃんどうしたの？大丈夫？前からこんな調子だよ…」

「大丈夫…大丈夫だ」

留美が狂愛へと堕ちてしまった日から俺は何も考えられなくなった。クリスマス会も気が付いたら終わり気が付いたら冬休みになっていた。その間に目が随分と腐った。いや、腐り切ったというべきか。何も考えられずただボーっとする日々を送っていた。世話係で来る彼女たちも気にせず。ただ不安そう顔をしていたが…

「八幡く～ん、調子はどう？具合悪いの？」

城廻先輩のゆるふわボイス。普通なら癒されるだろうこの声…だが俺にはそんな効果はない。兎に角、何故留美が狂愛に身を委ねたのか？狂った日以来の彼女たちと同じ目をしているのは何故か？それを知っているのは彼女たちだけだ。俺は意を決して城廻先輩に問う。

「城廻先輩…聞きたいことがあります」

「なにかな～？何でも聞いて良いよ」
「留美…鶴見留美をどうして『狂愛』に染めたんですか。どうして…何故？」
　途端に城廻先輩から笑顔が消え、あの目だ…鉄仮面のような形相…駄目だ読めない…
「何かおかしいことかな～？君の理解者を増やしただけだよ味方を増すことは間違いかな？」
「それは…」
「君の理解者、仲間が増えればその分守ってあげられる」
「だからって…留美をあんな風にすることはないでしょう!?留美は…留美は狂愛に染まることの必要性は！」
　俺は城廻先輩の肩を掴み訴える。だが、城廻先輩に焦りの表情もなく俺は不気味に感じた。それを察知したのか城廻先輩の唇の両端が上がりクスクスと笑いながら
「だってね、留美ちゃん…自分から狂愛に染まったんだよ？」
「…え」
　何も言えなかった。留美が自分から染まりに行っただと？そんな訳がない。元々は

雪ノ下が狂愛に染まりそこから由比ヶ浜、川崎、城廻先輩、雪ノ下さんたちを染めた。俺はこの誰かが留美を染めたと思ったが…

「最初はな留美ちゃん困惑していたみたいだよ?でもね君のことが段々好きになっちゃって…後で会ったら輪に入れて欲しい、て言って来たよ?だからね、君が何と言おうと留美ちゃんは自分から染まるだろうね…それが早かっただけだよ…そんなことより大丈夫?顔色悪いよ?あ、そうだお姉さんがハグしてあげるよ♡」

「あ…ぁぁ」

そうだったのか。じゃあ留美には狂愛が心のどこかに潜んでいたのか…それが雪ノ下と出会い早くなっただけ…俺がどう言おうと目の前の城廻先輩みたいになっていたのか。両手を大きく広げ笑顔で迎い入れている。機嫌を損ねさせるとマイナスでしかないので城廻先輩にハグをしお互いに抱き合う。あれ…俺は…なんで

城廻先輩とハグするのが嬉しく思っているんだろうか?怖い…怖いはずなのに何でだ。だけど今年はもう少しで終わりだ。だから、彼女たちは元旦は家族と過ごすので本来の家に戻る。それだけは救いだったかもしれない。そして、元旦の日に戻る。朝から近くの神社でお守りを買いに来て参拝をしにもきていた。尚、お守りは合格祈願だ。これは小町の為に受験が近いしな。最後に参拝して欲張りな願いをこめる。

小町が受かりますように

彼女たちが元に戻れますように

あの頃の日常に戻れますように

今までそんなに欲張ることはしなかった。だから今回だけは欲張らせてもらう。参拝を終わらせて絵馬を見る。人それぞれの様々な願いが込められている…例えば、自分の夢が叶うように、金持ちになれるように、勉強ができるように、甲子園に行けますように…思い思いに語っている。そんな中、気になるものを見つけた。

愛する人と永遠に結ばれますように

これだけの文章だ。普通なら素敵だろうな終わる。だがな似たような絵馬が七個もあるのだ。本当に不気味でしょうがない…なのにそれが自分に当てはまるような気がする。しかし、七個か…六個ならまだ確信できるが。じゃあなんだ幻の七人目、てか？笑えないぞこんな状況で…それにさっきから視線を感じる…目的は果たしたんだ。最後にくじでも引いた帰るか…さて引いて何々？

恋愛面　困難が訪れるでしょう

絶賛、困難が訪れてるわ。神様のバカ野郎。それともあれか更なる困難がやって来る、てか？勘弁してくれよ。あんな目をした奴がもう一人増えたらまじで死にそうだ。それにしてもカップルが多いな恋愛すんならあんな風に普通の恋がしたいぜ。さ、帰ろ帰ろ…嫉妬の炎が抑えてる内に帰るとするか…なんか中二くせぇことを言っていた気がするが気のせいだ。うん気のせい…さっきから俺を見ている人間がいるのも気のせいであって欲しい

神社からの帰り、参拝中に感じた視線を未だに感じる。気のせいであって欲しいがあの絵馬を見たときから妙に感じてしまう…敏感になっている。言っておくが…けしてやましいことではない。というかそんな風に考えられる状況と思う？

「そろそろ出てきたらどうですか？」

「あちゃ～見つかっちゃった」

テヘ☆みたいな顔をして物影から現れたのは雪ノ下さんだ。さっきから居たのはあんただったか…まあそんな気がしたけど。あの鉄仮面の笑顔ではなく愛と狂気に満ち手段を厭わない魔王が目の前に立っていた。

「なんの用すっか？」

「君を見守っていたんだよ？」
　くすくすと笑い満面の笑みを浮かべるが俺は身構える。
「盗聴やカメラ置いて？」
「それは私じゃない雪乃ちゃん」
　あれ？それは雪ノ下だったのか…それは置いといて
「…でもストーカーしてますよね？」
「してない、てば。君を守る為に…」
「だったら隣居ればいいじゃないですか」
「もう照れるな～お姉さんをその気にさせるつもり？」
「どんな気ですか…雪ノ下さん一言いいですか？」
「ん～？何々？」
「この関係…止めませんか？」
　一瞬にして空気が凍る。わーお今でも寒いのに更に温度下がったら凍死するぜぇ？さて洒落てる場合じゃないな。満面の笑みなんざ消えた雪ノ下さんは開いた瞳孔で俺を射抜くように睨む。
「何いってんのかな…八幡くん…それどういうこと？」
「雪ノ下さん…いや今の皆は狂ってるいや狂い過ぎてる。好意は嬉しいですよでもこれ

は間違っていませんか？」
　そうだ。俺はこんな関係を求めていない。こんな狂った関係は明らかに間違っている。だから訴える。これしかできないが…
「どこが？私たちは君を愛してるし君を危険な目に逢わせていないしどこに不安があるのかな…あ、もしかしてそういう関係？いいよ…八幡くんならこの体、いくらでも…」
　そういって俺に体を密着させる雪ノ下さん豊満な胸を押し付けてる。その言葉に偽りがない…まじっすか雪ノ下さん。でも
「そうじゃない…違うんですよ…雪ノ下さん。俺は本物が欲しい。それが何なのかは分からないでも今の関係は本物じゃない！」
「なんで、なんで、なんで…なんで！」
「おかしいですよね？ストーカーしたり飯に体液入れたりカメラ仕掛けるわ。これのどこに愛があるんですか！目を覚ましてください」
「じゃあ君はあのクラスの空間はどうだったの？君は利用した人間が平然を笑う世界…君は耐えられたの？」
「…人の醜い部分は昔から見て来てるんで平気っすよ」
「隼人や相模ちゃんがまた君を利用するかもしれなかったんだよ？特に隼人はね。それでも良いの？」

「葉山はあの時自分のグループを守りたいという考えに同調しただけで」
　俺はあの時、葉山のグループを守りたいという気持ちに同調して強引だが嘘告白というやり方で解消した…結果、俺はイジメを受ける羽目になった。大岡と大和は戸部の告白を邪魔したクソ野郎に見えただろう…それで噂が広まってしまい文化祭以上の悪評が広まってしまった。相模は文化祭の失態を俺に擦り付け葉山は真相を話すことなく俺がイジメを受けていることを知らず…いやそんなことを起きてるとは思わず日常を謳歌していた。これが彼女たちの怒りと狂気を生んだ元凶だ。もし早く葉山が真相を話していたなら彼女たちが狂気が表に出る事無くそのまま消えていったかもしれない。今更考えても遅いが
「ふーん、どこまでお人好しなんだろうね君は…ま、そんなところ含めて君のことが好きなんだけどね♡」
　ふふーんと笑う雪ノ下さん。その笑顔先ほど違い見守るような笑みであった。
「いいんだよ?私たちに依存しても溺れても…捻くれてて優しい君を守ってあげる」
　そういって彼女は振り返りどこかへ行ってしまった。だが、俺はそんなことを気にせずただ呆然と立ち尽くすだけだった。そうかもう…戻れないのか…あの頃に、そうだ分かり切っていただろう。葉山に言い捨てたあの言葉、俺もお前も救えない…そうだ。俺は結局…彼女たちの愛に溺れるしかないのか?

帰路に着くとセーターとコートを着て今時の女子の服装の一色と出会う。なんという運命か偶然にも目が合ってしまう。目と目と合う瞬間、好きに…は今はならないな。
「あ、先輩じゃないですか～」
「お前か一色…何してんだ？」
「ちょっとしたお出かけですよ、そういう先輩は？」
「神社に行って参拝と小町の為に合格祈願のお守りを買ってきただけだ」
「妹さん想いなんですね…意外」
「ばっか、千葉の兄妹なら普通だっつうの」
「うわっシスコン…それよりも先輩何処かお茶でも行きません？」

一色に誘われるがままにカフェへと足を踏み入れた。勿論、カップルだらけだ。甘々な雰囲気…羨ましいなんでラブコメの神様はなんであいつらをヤンデレ化してしまったのですか？ナイスなボートをお望みですか？ＣＤでぎゃーみたいな展開が欲しいんですか？だからって俺を選ばないでください。お互いに飲み物を頼んで一息着く。頃

合いを見計らって声を出す。
「一色…ちょっといいか？相談したいことがあってよ」
「ええ、先輩!?いきなりなんですか!?相談、て…ちょっと待ってください。弱いところ見せて女の子の保護欲そそらせてその気にさせて今のヘタレな先輩見てちょっと思いましたけどやっぱりごめんなさい」
「あのな…」
「はぁ～わかりましたよ。じゃあ聞かせてください」
俺は今の現状を伝えた。クリスマス会の時に夏休みに助けた小学生の女の子、留美が狂愛に染まったこと。雪ノ下さんに会ってもう二度とあの頃に戻れるのがほぼ不可能であること。俺はカップに残っているコーヒーを見つめながら何とか話した。一色は顎に手を置きながら話を聞いていた。時折。ふむ、とか言って
「ごめんなさい。全然分からないです。てへっ☆」
キラーンッという効果音がお似合いのポーズを取る一色にこれでもかという程睨む俺。
「…はぁ。恋愛をしたこともない私にもそんなことを言われましてもね」
「それも…そうだな。すまんな帰り見送るぞ」
「おっ流石先輩…良いこと言いますね」

「るっせ。奢るってやるよ」
　ごちになりまーす、と言って店を先に出た一色。それを横目で見つつ会計を支払う。外に出ると雪が降っている。別に珍しくない先月だって降ってたしな。一色を家まで見送るため一緒に歩く
「せんぱーい。手が冷たいので手を繋いでくださいよー」
「お前な…しょうがねぇなぁ」
　一色の手を軽く握り温かみを感じ取った。これ…見られたら殺されそう。雪ノ下はきっと眼前まで迫り、由比ヶ浜は手の平を舐めてきそうだな。川崎は多分何かしら言葉を連呼して城廻先輩は堕天するだろう。雪ノ下さんは知りたくないし考えたくもない。後でお仕置きされそうな気がするわ…
「ここが家か」
「ええそうですよ」
「そうか、じゃあな。また学校で」
「先輩」
「何だ」

「え？」

一色に呼ばれて振り返ると何かを握って首にそれを当てていた。まさかこれって

「お休みです♪せ　ん　ぱ　い　♡」ハイライトオフ

彼女たちと同じ目をしていた一色の表情を最後に記憶が途絶えた。

誰かが俺に乗っかっている…瞼を開けて視界が鮮明になると一色が俺の胸の上で抱きしめていた。
「あ、おはようございます先輩♡」
「お前…何をして…ここどこだよ…」
「私の家で私の部屋ですけど？」
見渡すと明らかの小物や可愛いらしいクッションなどが見れる。ただ、俺が鎖で腕をベットに固定されていることがなければな。違和感なんてなかっただろうに
「どういう真似だ？スタンガンで気絶させて」
「どういう真似？簡単ですよ…だって私も…」

「あなたのことを愛しているのですから♡」
「どういうことだ…俺とお前はあの依頼で初対面だったろうが」
「ええそうですね。確かにあの時が初対面でしたね。でも私はもっと前から知ってまし

たよ?」
「はぁ?」
「文化祭の時…私、文実のメンバーだったんですよ」
　何だって?まさか…こいつ…ずっと前から知ってたのか?俺のことを!
「その頃先輩のことを初めて見て。嫌々言いながらも仕事こなしてスローガン決めの時ですごいなー、て思いました。あとそれから屋上の出来事を知って先輩こと気になっちゃったんですよ。葉山先輩は幻滅しましたけどね…それに思い出してください…先輩に余計なことを押し付けていた人ですよ?先輩になんも得なんてないんですよ…だからあの時こっそり後をつけてご報告しました!てへっ☆」
「そうだったのか…だから葉山を」
「それに私のことを助けてくれましたもんね先輩。やっぱり優しい人なんだなーそれで頼りになる人…葉山先輩より何十倍も頼りになる人…そして、私を助けてくれる王子様。私はいじめから救ってくれる人を探していました…そして、それに値するふさわしい人が先輩だったんです。現に私を助けてくれましたし」
「違う、俺をお前を助けたんじゃない。依頼で助けただけだ。勘違いはやめとけ」
「でも助けてくれたじゃないですか…それに責任取ってください、て言いましたよね?」
「まさか…あの七個の絵馬…やはりそうだったのか…お前がもう一人の狂愛に染まっ

た」
「そうです♡だいせーかいですよ先輩♡」
そう言って、俺に唇を重ねてきた。舌を入れられ絡み合う。まるでニガサナイという意志を感じる。
「ぷはぁ…どうです？いろはちゃんのファーストキス…ついでに先輩のファーストキスも貰いちゃいました♡」
「はぁ…はぁ」
鎖で抵抗できない上に…満遍なく蹂躙された。
「皆さんもどうぞ」
「へ…？」
ドアが開くとそこに…いるではないか。雪ノ下たちが誰もがあの眼をしている。もう逃げられない。
「いろはちゃん。お疲れ～でもファーストキスはちょっとね～」
「む～いいじゃないですか！皆さんも先輩の体を堪能するんですから！」
こいつら何時から？ああそうか俺がスタンガンで気絶してる間に来てたのか
「陽乃さん。それでイライラしてたら奥さんは務まりませんよ？」
「でも初めてのキスはできない…けど今なら八幡にキスし放題」

「違うよ～留美ちゃん？これからもだよ～」
「えへへヒッキーとずっと…えへへ」
「計画通りね。ファーストキスは先払いした分仕事をこなしてくれたわね」
あぁ…そうか一色は最初から…協力してたのか…あの時は演技だったのか…最初から俺は彼女たちの手の平だったんだな。何もかも諦めた。やはり俺は救われない。結局俺は

狂愛に浸食されるんだな

俺の頬に優しく手を添える雪ノ下…その表情はまるで我が子をあやす母親のように
「八幡…あなたはもう傷付かないでいいの。誰もあなたの優しさを利用しないし誰も傷つけようとしない。これからも…だから私たちと一緒に…」

「幸せになりましょう。誰もあなたを傷付けないし傷付けさせない…私たちは一心同体。喜びも悲しみもずっと分かち合いましょう…もうあなたは犠牲になる必要はないのよ」

「そうか…もう俺は自分を犠牲にしなくてもいいんだ。だってこんなに俺を愛してくれてる人がいるのだから」
「そうよ八幡、おいで…皆待っているわ。だから…」

「お互いに愛しましょう。今から…これからもずっとずっと…私たちはあなたを愛しているわ」
「あぁ…俺もだ…皆好きだ…俺も…俺も」

「愛してる」

やったわ…やっと彼を手に入れた。あら、こんなの愛ではない？それがどうかしたのかしら？あなた達がどう言おうと私たちは改める気はないわ。それに愛する人の為に障害を取り払っても構わないでしょう？これが私たちの「愛」の形…それに彼は受け入れてくれたわ。本当の幸せはこれからね。さて、姉さんが用意してくれた屋敷に引っ越しする準備をしないと…そこが新しい家であり私たちと彼の愛の巣のだから…ふふ

、駄目笑いがこみ上げてしまうわ…花園計画完了ね

あっはははははは！愛してる！愛してるわ！八幡…誰よりもこの世界で誰よりも髪一本から細胞レベルまであなたのことを愛している…さあ行きましょう…新しい「生活」を

冬休み明け…

「八幡。おは…」

「ああ戸塚かおはよう」
　彩加が八幡に挨拶すると笑顔で返してくれた。そういつもの反応なのだ。なのに違う。そう違うのだ。目に光が無いのだ。死人みたいに…困惑する彩加をよそに結衣が八幡に抱きついた。
「ヒッキーおはよう！」
「おはよう結衣…行くか」
「え!?」
　おかしい…やはりおかしい。更に困惑する彩加に八幡は
「どうしたんだ戸塚？」
「いやその…そんな関係だったけ？由比ヶ浜さんと？」
「そうだぞ…そりゃ…」

「恋人なんだからよ。雪乃も沙希もめぐりさんも陽乃さんも留美もいろはも」
　言葉を失う彩加。そんなことに気にも留めず八幡は沙希とも腕を組み校舎へと…取り残された彩加は確信した。

「八幡…そんな…」
彼は沈んでしまった。いや、浸食されたのだ彼女たちの狂愛に…この事を材木座にも伝えたが、どうしようもなかった、既に手遅れだった。

元日明け小町は兄が豹変してしたことに気づき、陽乃を呼んで問い詰めるが
「お兄ちゃんについてです。何をしたんですか?」
「別に何も?ただ彼が私たちを選んでくれたんだよ」
「そんなの嘘だ!きっとだまし討ちでもして…」
「おい小町。陽乃さんにあまり突っかかるじゃない。困ってるだろう?」
「お、お兄ちゃん?ねえ目を覚まして!こんなの間違っているよ!だって…」
「あのな小町。陽乃さんはお前の義姉になるんだぞ?あまり失礼なことを言うんじゃない」
「え…嘘だ…そんなの…こんな…こんなことって…嘘…嘘だ嘘だ!だってお兄ちゃんは!」

「いい加減にしろ小町。お前は受験も控えているんだから勉強しろ」
「うう…うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「すみませんね。陽乃さん…」
「いいよ。これぐらい…てもうすぐに抱きつくなんて甘えん坊だな八幡は♡」
「いいじゃないですか…だって」

「好きなんですから。俺が求めた本物はこれなんですから」

俺の青春ラブコメは狂愛に浸食される　　完